家庭雜誌

第五拾九號

家庭叢書

定價各拾錢
郵税各二錢

- 第一巻 家庭の和樂
- 第二巻 夏の家庭
- 第三巻 玩具と遊戯
- 第四巻 家庭教育
- 第五巻 小兒養育
- 第六巻 家庭衛生
- 第七巻 家政整理
- 第八巻 簡易料理
- 第九巻 社交一斑
- 第十巻 婦人と職業
- 號外 家庭理財
- 號外 名士と家庭 近刊

家庭叢書發刊以來大に世の好評を博し、毎冊版を重ぬる幾回、實に非常の勢力を以て愛讀諸君の意に投じ、已に其三四冊は高等小學校及其以上にある女子教育の學校に於て、其教科用書となすに至り、又家庭の良教育、家庭の新生活、家庭の新組織及家庭の和樂、健全、進歩、改革、矯風、經濟衛生等に志ある家庭にては、必らず一本を座右に備ふに至れり、以て家庭叢書が如何なる勢力を以て世の家庭の摸範となり、顧問となり、助言者となるかを知るに足るべし

日清軍記續編

實見畫挿入
定價十五錢
郵税四錢

日清軍記前編は端を朝鮮内亂東學黨に發し平壤陷落の勇擧に收め後編は山縣大將出發より旅順口征服に至る各新聞は口々に評して曰く宛然一部の太平記を讀むが如し

續編旅順征服より大團圓に至るの記成る讀者此三編を併せ以て征清戰爭錄の完備なるものを快馬奔流の文章に求め得べし

- 再版 日清軍記 前編　定價十五錢 郵税四錢
- 再版 日清軍記 後編　定價十五錢 郵税四錢
- 征清壯烈談　定價十三錢 郵税二錢
- 第二 征清壯烈談 近刊　定價十三錢 郵税二錢

發兌元 東京市京橋區日吉町 民友社

國民小說

第一

第一國民小說は目下品切にて注文に難應

第二

定價拾五錢　郵稅六錢

目録

◎伊太利の四人　森田思軒譯
◎夢現境　嵯峨の屋主人
◎空蟬　同
◎罔雨　南翠外史
◎あひゞき　二葉亭四迷譯
◎航海小說羅武烈號　驚濤生譯
◎懺悔　賣薪生譯

◎曇天　抱一庵主人
◎石美人　白水居士
◎落武者　湖處子
◎空屋　西邱隱者
◎惡因緣　鷗外漁史
◎地震　同
◎うきよの波　同

第三

價拾五錢　郵稅四錢

目録

◎霜柱　饗庭篁村
◎用達會社　思軒居士
◎吾亡妻　宮崎三昧
◎明月　抱一庵主人
◎老人物語　愛山生
◎巨石　麗水生

◎村落小記　湖處子
◎宿魂鏡　透谷子
◎夏の夜がたり　敬亭生
◎雛嫁　若松賤子
◎女丈夫　鷗外漁史
◎迷の夢　櫻痴居士

第四

價拾五錢　郵稅四錢

目録

◎千人會　思軒居士
◎何處に？　小中村義象
◎離の菊　嵯峨の屋主人
◎七株松　落合直文
◎末期の言　警濤生
◎不二の高根　麗水生
◎懺悔　秋風閣主人

◎家妻　湖處子
◎白薔薇　蕭湖仙史譯
◎夏休　嵯峨の屋主人
◎田家新年　麗水生
◎物語の物語　秋山生譯
◎千島大尉　弦齋居士
◎盲新婦　塊南居士

發兌元　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

平民叢書全部拾貳册

第一卷 十九世紀之大勢
第二卷 世界經濟上之變動
第三卷 國家と政府
第四卷 教育と遺傳
第五卷 文明之弊及其救治
第六卷 現時之社會主義
第七卷 經濟と道德
第八卷 歷史攻究法
第九卷 哲學變遷史
第十卷 白皙人種之前途
號外 銀貨之過去現在未來
號外 責任內閣

發兌元 東京市京橋區日吉町四番地 民友社

定價 一册拾貳錢 號外一册拾錢 郵税各貳錢
全部取揃 御注文の節は 拾貳册 壹圓八拾錢 郵税八錢にて御注文に應ず

六版 國民叢書 青年と教育 定價拾五錢 郵税二錢
十一版 國民叢書 靜思餘錄 定價拾五錢 郵税二錢
六版 國民叢書 文學斷片 定價拾五錢 郵税四錢
四版 國民叢書 天然と人 定價二十錢 郵税四錢

發兌元 東京市京橋區日吉町四番地 民友社

婦人科小兒科專門 赤阪區丹後町一番地安藤邸角 女醫 大村のぶ子

家庭雜誌

○毎月二回十日廿五日發兌

定價		地方郵税共
一册	金五錢	金五錢五厘
半年(十二册)	前金五十錢	金五十六錢
一年(廿四册)	同金一圓	金一圓十二錢

○廣告料一行(廿四字詰一回ニ付)金八錢
○本誌御注文ハ前金爲替向所ハ芝口郵便支局

本社電話番號七十番

發行兼印刷人 金子佐治郎
編輯人 塚越芳太郎

發行所 東京市京橋區日吉町四番地 家庭雜誌社

明治廿八年八月十日發行

家庭雜誌第五拾九號

目録

社評

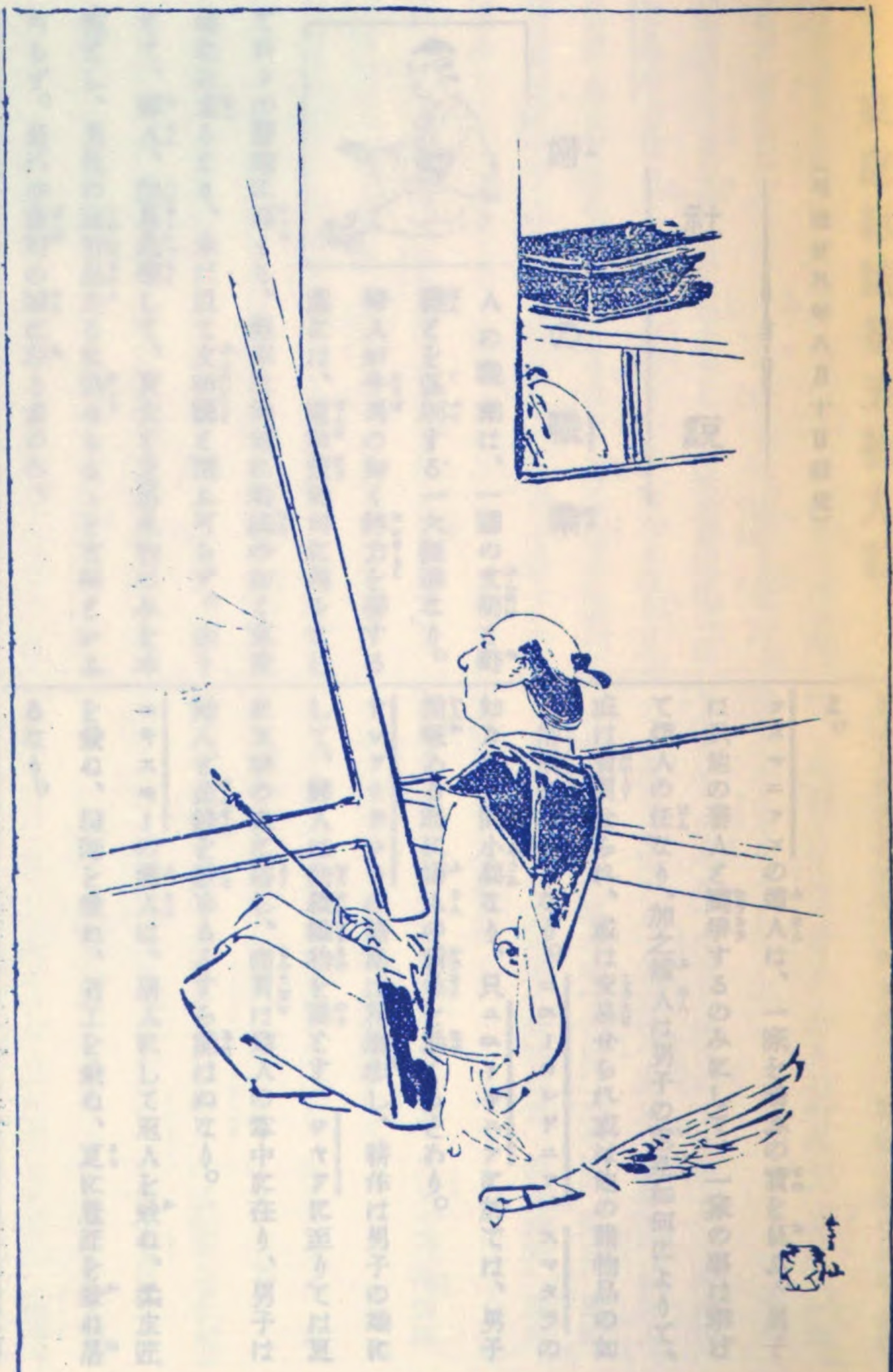
科學

文藝

家政

雜録

時事一斑



社説

婦人の職業



人の職業は、一國の文明と野蠻とを區別する一大標準なり。婦人が牛馬の如く躰力を勞する處には、電氣燈如何に煌々として戸々の簷端に輝くも、滊車は如何に蜘網の如く東西南北に走るとも、未だ以て文明國と謂ふ可らず。去りとて、婦人、閑居逸樂して、買食と芝居見物のみを本職とし、男兒の玩弄品たるに供せらるゝを文明といふ可らず。是れ亦蠻野の域に在る者のみ。

試みに野蠻國の婦人が如何なる職業を有する乎を看よ。

タスマニアンの婦人は、一家を養ふの責を負ふ。男子は只他の蕃人と闘爭するのみにして、一家の事は擧げて婦人の任なり、加之婦人は男子の意見如何によりて、或は賣買せられ、或は交易せられ或は他の諸物品の如く借用せらるゝなり。ニユーカレドニア、スマタラの如きは大同小異なり、只ニユーギニアに於ては、男子閑暇ある時に婦人の耕作を助くるとあり。

サンドウヰッチの諸島は稍進歩し、耕作は男子の業にして、婦人は紡績織物を業とす、ジヤワに至りては更に文明の光に浴し、商買は婦人の掌中に在り、男子は殆んど金錢を數ゆるとすら能はぬなり。

エキスモーの婦人は、屠人にして庖人を兼ね、柔皮匠を兼ね、縫師を兼ね、石工を兼ね、更に履匠を兼ね居るなり。

アメリカインヂアン中の闘争を好む種屬の婦人は、多く殘酷なる力役に服す、最も穏和なる種屬チンノックに至りては勞力を男女の間に平等に分配す。クリークの婦人の如きは、裸躰にして、背に材木を負ひ、牛馬の如く運搬するとあり。南ブラジルに於ては、婦人は農業に從事し、自ら耕作するなり。

ニカラガの如きは、頗る蠻習を脱し、婦人は家庭の外に、商賣に從事す、耕作及其他力役は、男子自ら之に當る。

亞弗利加ホッテントットに於ては、婦人は力役して、男子、彼女自身及小兒の衣食を給するの任務を有す、ダマランに至りては家屋を建築するも、壁土を塗るも、野に耕作するも總て婦人の業なり。東部亞弗利加に於ては、婦人は、外に出て、田を耕やし、穀物を植へ、小屋を建て、男子は内に在りて、糸をつむぎ、衣を織り、牛乳を搾る、

野蠻國に於て婦人の職業は此の如く、力役的也、獸力的也、世の文明に進むに從て、婦人の職業は纖巧なる指頭を用ゆる技術的職業、又は學問、事務の上に立てる職業に轉移し行く也。今日歐米婦人の職業を數ゆるに、左の如く、男子の領分内に侵入し來れり。

敎師、科學者、髪飾帽子製造人、衣裳仕立人、履匠、書記、洗濯業、紡績業、

等は格別珍らしきにあらずとするも、更に左の新職業に從事するものあり。

蜜蜂飼養者、植木家、新聞記者、電信技師、麵包師、代言人、製本師、花屋、化學者、醫者、電話技師、籃細工人、彫刻師、桶匠、建築師、仲買人

就中醫師、製本業、電信技師の如きは最も多く婦人の割據する所となれり。

顧みて我邦の情態を看よ、婦人の職業は、果して一般の進歩と並行して擴充しつゝある乎否乎。

牛馬の如く力役する婦人は我邦に絶無なるに至れる乎否乎。所謂野蠻國の婦人よりも殘酷の職業を執る婦人あるにはあらざる乎、薪を負ふの婦人、田を耕へすの婦人を田舍に見るとは珍らしからぬとにあらずや。牛馬の力もて動かすべき荷車をかよわき手にて引く所の婦人、男子すら重しとする土石を肩に擔ふて運搬する所の婦人を日本一の大都會の眞中に屢々見るとあるにあらずや。而して多くの婦人は職業なく、只男子に飼養せられ、男子一たび死して、自活自立の道なく、節を賣り、身を賣り、神聖なる一身を男兒の玩弄に委するに終るものにあらざるなきを得る乎。文明國の婦人は果して斯の如きものなる乎、抑も亦我日本國は未だ野蠻國たるを脱する能はざる乎。

婦人に力役を强ゆるは、婦人の健康を害す。婦人は、兒を產むの一點に於て男子と相異なるが如く、其躰力に於て、男子に及ばざる所あり、インヂアンの婦人及日耳曼農夫の婦人の如きは、餘りに苦役に服するが爲め、夭折するもの多く、槪して二十五才位にして、老衰枯凋すといふ。吾人は、我邦に於て荷車など推輓する婦人の容貌いとやつれて、殆ど四五十才の老婦人の如く見ゆるもの、其實際の年齡を問へば、僅に三十前後或は二十四五才なるを發見するとあり。是等の婦人にして、早逝するとあらば、是れ取りも直さず、是の如き職業を婦人に强ゆる男子之を殺ろす也。否婦人が斯の如き職業を執るを傍觀する社會之を殺ろす也。

男子の保庇の下に、閑居逸樂を夢見る婦人は、更に憐れむ可き也。力役の婦人は、其勞力に對して、それ相應の自由あり、獨立あり、權力あり、其夫に對して、全くの奴隷にはあらざる也。然れども、職業なき閑居逸樂の婦人に至りては、男兒の所有物也。固より自由なし、獨立なし。彼等は、家に在りて、全くの奴隷たるが故に、人情の常として、何の處に於てか、其屈せ

るものを伸さんとするなり。是に於て乎、主人の留守の間に威張るなり、主人の留守の間に不善を爲すなり、主人の目を盗んで、外に在りて不義を働くなり。而して其夫一たび沒するに及んでは、彼等は、生活の道に迷ひ、操を破りて、再び他の男子に嫁する乎、他の男子の玩弄品となる乎、然らざれば、俄かに内職を始めて、一家の口を糊せざるを得ざるなり。

寧ろ若かん哉、一家不足なく、暮すの日に於て、婦人も亦職業を有せんには。

職業は神聖なり、高貴なり、慥かなる良心の宿る所也正しき品行の存する所也。我邦の良家多く、婦人の内職を賤しみ、婦人は只逸樂閑居するを高しとなす、頗倒も亦甚だしからずや。婦人の内職は、獨り一家の經濟を助くるが爲めに、必要なるにあらざるなり。一家に健全なる風儀を作るが爲めに必要也、一家に勤儉力行の風儀を作るが爲めに必要也、一家に高尚なる快樂を與ゆるが爲めに必要也。婦人を虐待酷遇より救ふが爲めに必要也。婦人に清操貞節を全ふせしむるが爲めに必要也。大日本膨脹の氣運に立てる諸愛姉よ、願くは速に内職を賤むの陋習を打破して、各一個の職業を求めよ。是れ獨り諸愛姉の爲めのみにあらず、抑亦日本國を文明に致す所以の一大進轉也。

科學

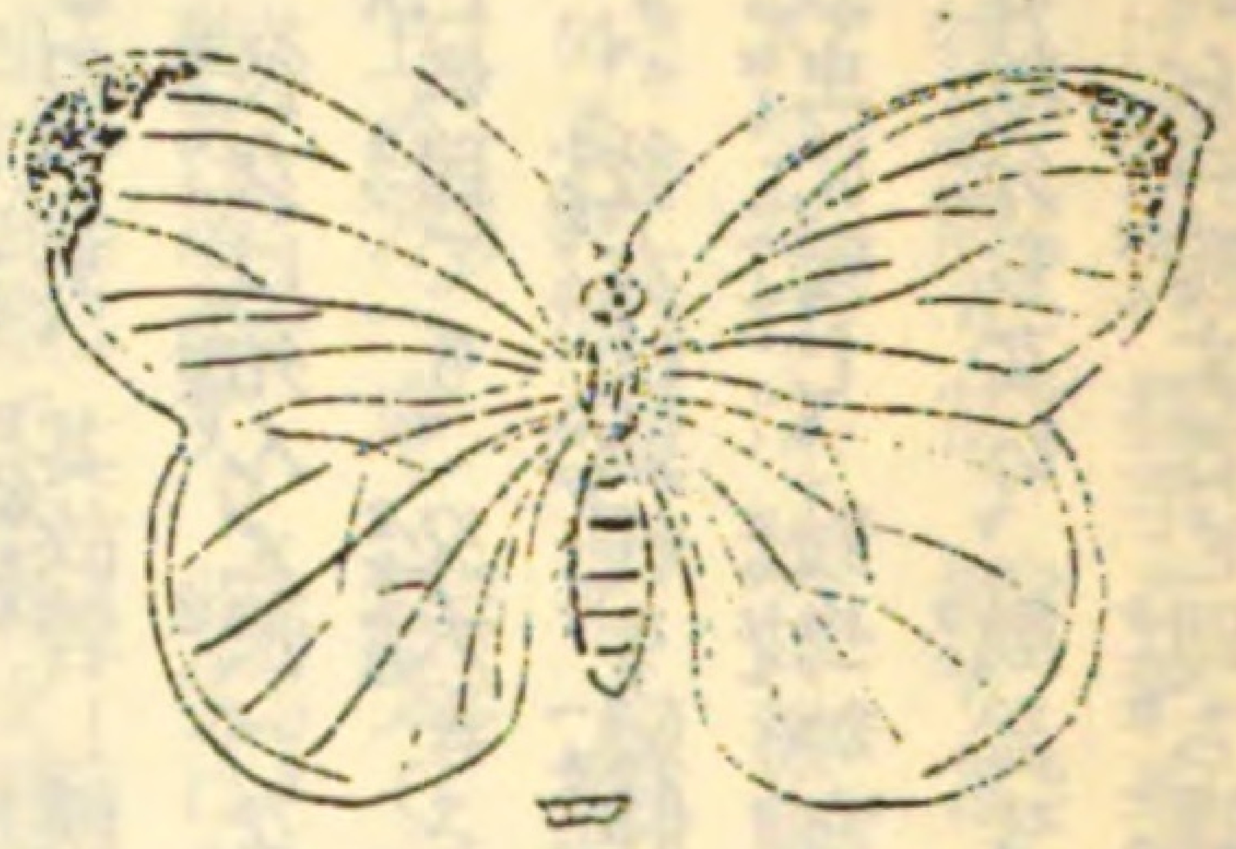
小兒の世界

蝶

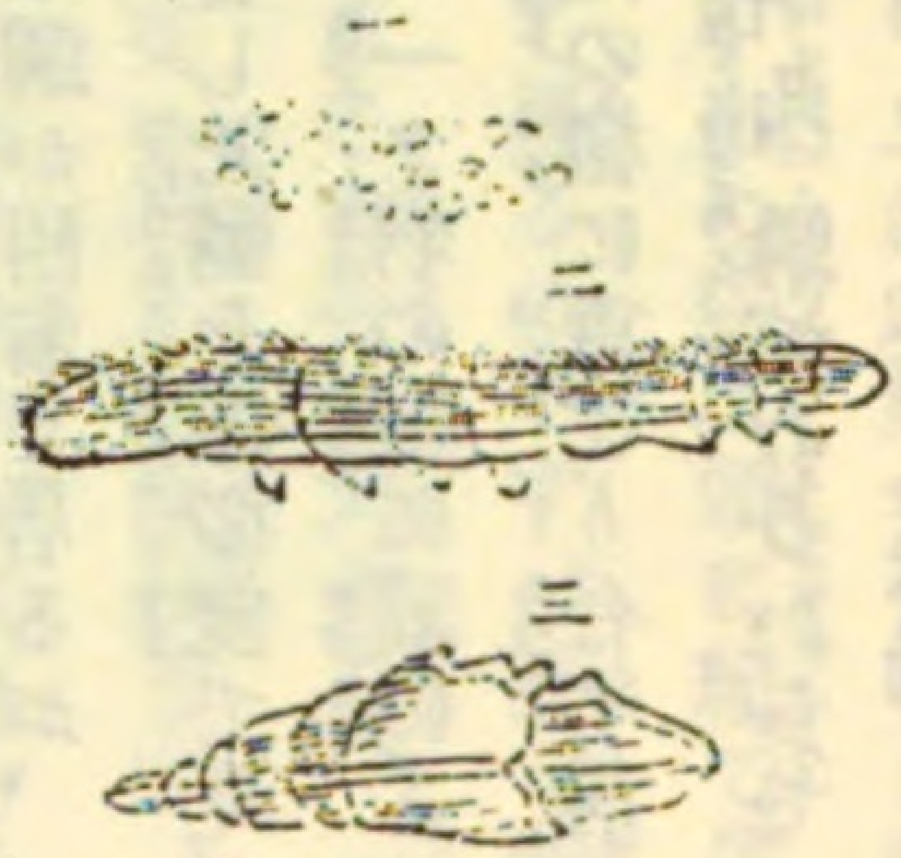
嵯峨のや主人

皆様は野原や花園の間を、翩々として飛びまはる蝶を御存でせうが、如何に其翼色が美しく、如何に其姿が愛らしいでせう、然し躰の搆造や、彼女の變躰を御存です歟、若し御存なければ話しませう、動物學は斯い

ふ事を言て居ますよ



何故蝶は彼樣に勉強して、花から花と飛まはり、而して香氣高い花心の中に首をさし込で居るのでせう？、其は露を吸ふ爲です、露が彼女の食物ですから。然らば彼女にも口があるのでせう歟？、有ますよ、有ますが彼女の口は大に他の者の口と違て居ます。彼女の口は象の鼻の樣に管形になッて居るので、口と言ふよりは、寧ろ鼻と言ふ方が好位の事で。ですから彼女の物を喫ません、唯管口で吸ふ丈です。此管口はつまり管になッて居る腮です。露を吸ふ



時には、彼女は其管口を延し、又飛ぶ時には之を平たくします。

蝶に據て、此管口の長いのもあれば、短いのも有り、又全然無のも有ます。然し無のは如何して露を吸ふでせう？、口がなくては吸樣が有ませんね。左樣です、彼女は食はず呑まずに一生を送るのです。其代り彼女の一生は卵を産附る日の一日、一日が彼女の一生です。之を思へばお子供樣、棒ちぎり木をふり廻はして、蝶の翼なぞを打つのはお廢なさいよ、可哀相に、其でなくとも短い命、哀れ譬にさへも人の命の短さを、蝶の命に比べるでは有ません歟

蝶の頭には針の樣な細い長い鬚が有、又二ッ大きな目が有ます、此目は一寸見れば唯二ッの目だが、よく見ると幾百ともない小さな目から成立た甚だ入組んだ目で、實に奇妙な目では有ません歟。又稍引延た樣な胸に、二對の大きな翼と六ッの小さな長い節のある足と

が附て居ます。而して此二對の翼、即ち四ッの翼には、數も限も分らない程多の、小さな、奇麗な、種々の色の鱗が附着て居るが、一寸見ては粉かと思はれます。若し此鱗を顯微鏡で見ると、其尖がッた方の一端は、一ッ一ッ羽の樣に翼にさゝり、又他の廣い方は、家根の瓦の樣に重なり合て居ます。蝶の翼の奇麗なのは、畢竟此鱗があるからで、然も此鱗は羽の代りを勤めて居るのです、其故若し誤まつて此鱗を落して御覽なさい、彼女は殆んど飛べなくなります

翼色に因ても、又大きさに依ても、蝶の種類は澤山有ます、彼女は孰れも變躰するが、其順序は、始め卵から跂虫に變じ、跂虫から螟蛉と言て、生て居る歟死で居る歟分らない、動きも何もせぬ物に變じます。此螟蛉から一變すると即ち蝶で、蝶は卵を產むと死ますから、彼女は自己の子を見た事が有ません、然し其でも產む時には、佶度子供が食物に有附さうな所を見立て產みます。

蝶は御覽の如く美しい者だが、又何の害をも爲しません、然し彼女の前身の跂虫は、性質恐ろしい貪食家で、庭となく、野となく、林となく、圃となく、所きらはず害を爲て歩きますが、造化は全能力者です、鳥及び他の虫をして、此跂虫を退治させます

甲虫

甲虫は何處にでも居るから、之も皆樣御存でせう、然し之もよく觀る、と又新しい發見が有ます

先づ葉の青々と繁た荊垣なぞに、ちんとすまして居る甲虫を捕へて、よく裏表を反して御覽なさい、小さな彼の躰は、頭、胸、腹の三部分から成立て居ますから。彼の頭は甚だ小さく、然も左右に動きません、兩の眼は蛙の樣に頭に附て居るが、其光て大きうございますこと。其に口は六つの部分から成立て居るが、其は二つの唇、と四つの腮からで、而して其腮は自由に動き、

彼の歯は物を喰ます。其上下腮と下唇とに、小さな節のある、枝の様な髯の様な物があります、之は感觸者、又は觸手、探手などと名附られるもので、甲虫は之で食物を觸り試、探り當、又押へ附て食るので、此様な込入つた口は、如何様動物にもまだ見た事が有ません、此外まだ頭の上に、鬚の様な二つの尖があるが、此尖は上の方へゆく程太くなり、而して端に扇の様な飾が附着て居ます。此尖は矢張虫鬚と名附られるもので、甲虫は此鬚でも物を觸り當てます。

甲虫の胸は頭に續て居ますが、其は三つの環から成立て居るのです、然も頭に近い第一の環は、他のに比べると割合に大きく、一寸見た時は、之れ一つが胸ではないかと思はれます、第二第三の環は、羽が生てくるともう上からは見えません、何故なら大變厚い羽で蔽はれて居るのですから、胸の環には各下の方から一對の足が生て居ます、其上第二の環には、上の方から厚い上羽（又羽おほひといふ）が生て居て、第三の環には眞實の羽が生て居ます。

甲虫の腹は、上羽でかくれて居るから、上からは見えないが、七つの黒い環から成立て居て、然も其環には各横の方から、何の爲めだか三角の尖點が附て居ます。

甲虫の足は、盡く五つの部分から成立て居るが、最後の部分、獸で言へば脚掌とも云ふべき部分は、又五つの節から成立て居て、然も其節の終には、二つの爪が附て居ますが、此五節の部分を甲虫の脚掌と名附ます、此節多き足に依て甲虫は動き、又此脚掌に依て木の葉や枝に確りととまつて居るのです

今申した通、甲虫は此様な多くの關節から成立て居るので、胸に三つ、腹に七つ、の節がある斗ではない、口も足も矢張關節から成立て居るし、鬚にさへも關節があるのです。其故動物學では、甲虫を關節動物とし

で數へて居ます。

甲虫の背には赤黒く光る、二ッの大きな羽があるが、之は頗る硬く、又縱に縞が有ます。羽の名は有るが、是は其實羽では有ません。此様な硬い重い羽で如何して飛ませう？、是は眞の羽の蓋ひで、「羽蓋と名附られます。甲虫は飛ばうと思ふ時には、此上羽を上へ擧て、其下から二ッの薄い柔らかな羽を擴げます、此柔かな羽は頗る薄く、殆んど透明る程ではあるが、然し其で居て可成重い甲虫の躰を空に支へ、飛ぶには差支ないのです。甲虫の飛ぶ時はジゥといふ響がしますが、之は羽の音で、甲虫には聲はないのです。



甲虫の牝は、一旦卵を地に産附ると、もうふり向ても見ません、甲虫は矢張數度の變躰をしますが、卵から産れるのは白い虫で、此虫が三年三月經つと螟蛉になり、螟蛉から甲虫になるのです、甲虫は人には何の害もしませんが、然し庭に於ては木の葉を食荒して不可ません、」若試に甲虫を押つぶして御覧なさい、赤い血の代りに白い血が出ますから。而して幾ら壓ても骨は有ません、ですから彼の躰内は頗る軟かで、却て頭や胸や、腹を蔽ふて居る外皮の方が硬うございます。蓋し造化は骨の代りに、外皮を堅固に造ッたものと見えます。甲虫の内部には骨はないが、胃、と肺、と神系とは有ます、ですから

彼は嗅たり、感じたり、動いたりするのです、然し肺と云ても、獸の肺とは大に異なッて、唯小さな管に過ないので、之は彼の全身に通じて居るが、其口は腹及び胸の環の脇に於て開て居ます。此呼吸の管は呼吸管と名附られて、管を通る空氣は血と接して居ます。甲虫には聽感も、嗅感もないが、觸感丈は有ます、然し其も躰の全躰にではなく、重に其力は鬚に集まッて居るのです。

若甲虫の如き關節組織の動物を見たならば、我々は猶預なく其を、關節動物の中に組入ませう。然も甲虫の如く三對の足(故に六足)を持て居る動物は、猶豫なく六足蟲として數へませう、前號に述べた蜘蛛の如きも、又是關節動物ではあるが、六足蟲では有ません、何故なら蜘蛛の足は八本有ますから。蜜蜂、黃蜂、蠅なぞは、形こそ甲蟲に似て居ませんが、六足蟲の中へ入れねはなりません、何故なら彼等は關節動物であるのみならず、足も又六本有ますから。

正誤、前號蜘蛛の事を記述せる條中、十一片最後の行中、「近世博物學者は彼を蟲の種類に算入せず、」と記せる中、蟲の種類は六足蟲の誤、蜘蛛は何處迄も蟲で、蜘蛛を虫でないといふ事は云へない理でした、只足が八本ある故、六足蟲の階級に算入せない丈の事で、然るを虫の種類に算入せずと致したのは、全く私の過失でした、

文藝

天使

小巣

昨夜天使我窓に來る、雪よりも白き其衣、花よりも美しき其姿、月よりも淸き其眼元、天より大なる情の面影、誰歟心を波立たせざらむ

彼女は流水より淸き聲を揚て、天國の歌を歌ひけり、神の情の深さ、廣さ、天の花園の樂しさ美しさ、罪なき魂の遊べる樣、皆其歌に歌はれぬ、照る月、晃く星、聳ゆる山、流るゝ河、森も、霞も、野も、里も、皆其聲に聞惚ぬ、聲は浮世のものならで、高き天國の聲なりき

嗚呼、やさしかる汝の情、淸かる汝の心も、浮世の誰歟尊ばん、塵の浮世に降立ては、愛の籠れる汝の歌も、聽く人なきを如何にせん

されど彼女は尙ほ世を棄ず、夢歟、現歟、幻歟、煙霞の如く、薄霧の如く、暫時宙宇に迷へりしぞ、如何なる情、如何なる望の、其心にはこもりけん

杜鵑一聲雲間に消へて、影はいづこぞ天の月、其面影も、其歌も、見えず聞えずなりにけり、見えず聞えずなりぬれど、歌の意と面影は、世に永久に殘るらむ

比喩談

二疋の猫

湘川漁夫

共に血統賤しからぬ、舊き家柄より出でながら、肥えたると痩せたると、其生活の度に於ては、大に異なれる、兄弟の猫ありけり、兄猫は議員、判事、又は僧正の如く、日々美味に飽き、頷も頬も落ちんとするまでに肉づき、體はまるまると太りかへり居れど、弟猫は、猫の本分を守りて、鼠を捉ることを務め、かつえたる顔色にて、家の隅壁の隙間、牀の穴等を窺ひ、朝より晩まで働き居れど、滿足の食物をも得ることなく、骨と皮とのみに痩せ萎れ居りけり。

弟猫は遂に飢に堪へ難くやありけん、兄猫に對ひて「御身は終日なまけ、我身は怠らず働き居れど、何故に御身は安樂にして、我身は飢死せんとし、御身は肥えて我身は痩するか其故をきゝたし」と、尋ねけり。

兄猫はぬからぬ顔して「其は賭易き道理なり。御身は正直に過ぎ、眞心一つに鼠のみを求むるに由りてなり」と告げ聽かせけり。

弟猫は倘訝しさに「其は正しき事ならずや」と再び問ひけり。

兄猫は又答へて「如何にも正しき事なるべし。されど御身は只猫として主人に事ふるのみ。我は常に主人の傍に坐り、頓智を用ゐて、其機嫌を取り、其寵を得て又食物を得、政治の學校にて、學び得たる術を用ゐ、始めに少く望みて、後に多くを得るなり、成効の極祕は實用の働に非ずして、詐の術にあり、此世の中にて榮えんとせば、宜しく術を用ゐ、なるべく務を怠るべし」と笑ひ語りけり。

正道或は世の幸福に伴はず。

守錢奴と其子

吝嗇の老爺、不思議にも町に行きて、數個の林檎を買ひ來り、密かなる部屋に隠し置き、其入口に、二重にも三重にも、錠を下ろし、獨り自らしばしば其中に入りて、幾度も數をかぞふるとを最上の樂とせり、只爰に悲しむべき事は、かほどに珍重せる林檎も腐れ始めければ、老爺は歎きつゝ、傷みしを擇り分けて食ひ、他は倘前の如く大切に仕舞ひ置きけり。學校に通へる其子、食不足の折、風と林檎の隠しある場所を見出し二人の友を連れ來り、遠慮なく空腹を癒しけり、老爺は見つけ、驚きて立ち上り、万事畢りたるが如き面持にて、大聲を發し「失ひたる林檎を、一つゝ、直ちに返せ、左なくば誰が子も皆絞め殺さん」と怒りけるを其子は制し「父上よ、靜かになされよ我等は皆不行儀の者にあらねば、惡しき業は決して行はず、安心なされよ我等は、腐りたるを父に殘し、只腐らぬを食ひたるのみなり」と答へけり。

物を吝みて腐敗に至らしむる勿れ

二人の禿頭

二人の禿頭の乞食、風と地の上に何かきらめく物あるをみつけ、互に之を得んとて、打ちつ蹴りつ、挑み爭ひ、破れたる着物を散々に引き裂き、顔には黑き痣をつけ、其一人頭に殘れる僅かの髪の毛をひきむしられ、遂に漸くにして其物を得、取り上げて能く能く見れば、是は己等の益にも立たぬ缺櫛にてありき。

愚人は命を牲にして無益の寶を爭ふ

おはなし（三）

鴨と月　　蘭芳

鴨、魚を捕へんとて、流れに泳ぎ、終日のながきにわたりしが、遂に一尾だも得ざりけり。夜は來りぬ、鴨は水上の月影を見て、魚と思ひこみ、これのがさじと、深く水中に潜り入りたるに、他の鴨來り、これをみて嘲りける。彼鴨大にはぢて、此より勇氣を失ひ、偶々水中に魚を見るも、捕ふる事なく、遂に飢て死しぬ。」

狼と弓

獵人、弓矢を携へ狩にいで、山羊をころしければ、肩に打掛け、家路にいそぎし途中、思ひがけなく野猪を認め、山羊を下し、猪を射て、傷を負はせぬ。猪は獵人に衝てかゝり、牙を以て刺殺し、其身も深傷のために死にけり、狼、血を嗅ぎ付け、山羊、猪、人、弓などの横はれる處に來り、大によろこび、獨言つやう

さあ、長い間の食物が出來た、が一度に食つてはしまうまい、ちよつとでもむだにしないやうに、一度に少しづゝ、食ふ事としよふ、先づ一ばんに、硬い處から、だん／＼軟い美味いとこを食ふ。

かくいつゝ、狼は、山羊、猪、人を嗅ぎ、

これは軟いから後にまわして、食いはじめに、此弓の筈を食はふ。

と弓の筈を嚙みはじめけるが、弦を嚙むや、弓反回り、狼の腹を打ちければ、猪も亦死んでけり。やがて他の狼等來り、人、山羊、猪、狼等、餘すことなく、食ひつくせり。

二匹の馬

二匹の馬、荷を負ひつゝ運びゆきけるが、前なる馬はよく歩めども、後なる馬は怠惰たり。馬士は後馬の負へる荷物を取り下し、前馬に積みかへければ、後馬はいとあゆみやすくなりしを、覺え前馬にいふやう、

御苦勞〳〵、君がマアよくやることと、よつぽどよく辛抱ができるねえ、

かくて立場に達しければ、荷主は、

一匹で澤山だ、二匹の馬を飼つて何にならふ?、蒭は一匹に食はした方がよつぽどいゝ、彼馬は衝き殺して仕舞ふ、皮でもとれる、

といひつゝ怠惰馬を打殺せり。

牝鶏と雛子

牝鶏雛子を産み、育てかたを知らざりければ、母は雛子に向ひて、

も一度卵に入つておくれ、そうすれば、我は前の様に、いゝぐあひに、御身等の上に坐つて、氣をつけてやりましよふ、

といへば、雛子は皆母の言に從ひ、卵に入らんとせしが、如何にしても入り得ず、翼を害ひければ、一羽の雛子母に向ひ、

私共が、始終卵にはいつておらなければならないなら、いつそ初めから、出して下さらなかつたが、よつぽど、よございましたでしように。

高慢なる雄鶏

二羽の雄鶏、芥溜の上にて、蹴合ひしが、一はつよくして、他の雄鶏を打負かし、芥溜の上より、逐ひ落せり。牝鶏は雄鶏のまわりに集り來りて、讃めたゝへぬ、

かれは隣の庭に吾強力と、榮譽とを知らせんものと、穀倉の頂に飛び、皷翼して、聲高に、

皆見て呉れ、己は百戰百勝の雄鷄だよ、世界中に己ほどつよい鷄は居ないぞ、

と鳴きけるが、凱歌未だ終らざるに、思ひきや、鷹來りて、これを引摑んで巢に運び去れり。

馬鹿と小刀

馬鹿者、よき小刀をもちけるが、釘を切らんとせしも、切れざりしかば、馬鹿者は

此小刀はいけない！

といひつゝ、軟なる海月を切りみしに、刄通るや否や、またもとの如く合ひぬ、馬鹿者は、

つまらない小刀だ！

と唸やきつゝ、其よき小刀を投げ捨てけり。

細かなる糸

或人糸屋に細かなる糸を注文せり。糸屋は注文に應じて之を製せしに、或人のいふやう

これはよくない、己は極々細かな糸を望むのだ。

糸屋も―これが、御望にかないませんければ、此處にお氣にいりさうなのが、ございます、

と空を指しけり。或人少しもみえずといひければ、糸屋

其お見えなさいませんのが極々細かい證據でございます、私でさへ見えません、

といひければ、馬鹿者は大によろこび、此の通りのものを澤山にあつらへ、金を拂へり。

樂しき旅（三）

藤島ゆき

八日空よく晴たり。朝とく父母君と共と車にて出づ。仙洞御所はいとめけだかく、師範學校のつくりざま大いなるもいと喜ばし。同志社は煉瓦にてつみたり。宮

寺の多かる中に、獨外國ぶりの家の高く聳えたてる。何となく感じ起りぬ。わが友の此月の始より此處の女子部に入學せりと遙に聞て來つれば、訪はまほしさ限なけれど、せんすへなくて心にものがたりしつゝ、木間を過て相國寺に入る。多かる寶物の中に、雪舟の畫し龍虎、ことにすぐれて覺ゆ。本堂にては、朝のつとめならむ、美はしきけさかけたる僧數多立並て經よみゐたり。こゝを出て紫野なる大德寺にゆく。こゝにも數々の寶物あり。一つ〳〵おぼえつくしがたし。庭はかねて美くしと聞ゐしもしるく、砂きよらかにきわたしたる、いひしらず。こゝかしこにたてたる石皆さま〴〵の佛のかたちしたりときけど、更によしあしもわかちえず。唯田畑山などを遠く見わたし、庭中を流るゝ水のうつくしさのみ心とまりて、われをわすれつゝ、いつまでもかくてありたしと覺えぬ。かたへの門を入れば、優待室にて茶菓の供あり。もてなしいとねもごろなり。こゝに三齊公の御茶杓ありき。玄關の側に利休のおくづきあり。この比學びゐる茶のわさをすゝましめ給へと祈る。こゝより上賀茂に詣で、御まもりどもうけ奉りて出づ。境内いとひろく芝うつくしく生て、子等のあそばんにはよきところならむと覺えしに、あなたこなたに幼子打つどひて、走るもあれば旗打ふるもあり。きけばなにがし小學校の運動會なりとぞ。祭日にはこゝにて競馬あるよしなり。此處を出て杉の老木右左に生たち、いとも〳〵長き堤を過て下賀茂にゆく。上下の御社ともに朱塗にていと壯嚴なり。かねては見む事かたき寶物をもこたびはゆるされしなりと。白衣着たる宮人のかたるもしるく、いと珍らかに尊とき品多かり。神前にいでつゝしみておろがみまつる。こゝは昔やんごとなきあたりの人ならでは入りがたかりし所なりときくもいとかしこし。兩側に名だかき葵祭御影祭の時に用ゐる調度くさ〴〵あり。すべ

て古式のまゝになすといへり。又いと古き御宸筆あまたを拜觀し、御守をうけて出づ。門内の柊を見て前なる家に入りひるげす。人來つどひていとなげなり。家ゐの美くしきはいと心地よし。長き橋をわたりて百萬遍にゆく。こゝはあまり人來ぬよしなれど寶物數々にて、寺のうちいと美くしくふき清めたり。京極黄門の家集かざりてありき。殊に目とまりぬ。二條天皇の御陵ををろがみ、道風のおくづきの前わたりす。前に池あり。墓は紅葉の中にあり。こゝを過て銀閣寺にゆく。寶物あまたある中に、優待者のみを香の間にいれて別に又みすといふ。義政公の筆跡與二郎の釜などあり。此釜を獻上してより、釜師の名を與へられしなりとぞ先に行けば香の間なり。香の具すべてかざりあり。また花生けてあり。眞古流なりとぞ。僧の語るをきけば、茶花香共に義政公より傳はりしなれど、今は花のみ殘れるなりとぞ。こゝにて香をきく。又茶席にて茶菓のまうけあり。四疊半の式はこゝよりはじまれるなりと云ふ。こゝより庭におりたち、銀閣寺のもとに上る。池にかけわたしたる橋を渡りてゆく。家造り金閣寺にひとし。されどこゝは二階なり。下に降ればこゝにも生花あり。又こゝにても彼名をしらぬ虫の聲す。やがて立いづれば、日照りていと暑し。眞如堂にゆき又黑谷に入りて、寶物の一枚起請觀音などを見持佛堂にゆく。こゝに熊谷直實の墓あり。南禪寺に至る。本堂は火災の爲にあとを殘さずいと／＼あたらし。方丈のかたに寶物あり。山門のあたり萩いと多し。錦おれる秋の頃いかならむと母君に語りまつれば、さなり高尾の紅葉みがてら秋の頃またとひこむと父君の給ふ。いと嬉し。かたへの寺にゆく。此處は昔より細川侯の御寺のよしなり。貝の化したるいと多し。庭におりてわが爲には大伯父君大伯母君なる横井小楠先生夫妻の君の御墓にまうづ。大伯父君はわが生いでぬ前に世を去

りましつれど、大伯母君は去年まで長らへゐ給ひて、わが千葉にゐし頃も音づれ給ゐ、東京の家にもあまた度とひきましつるなれば、今更にそのかみの事ども又何くれとかたらひ給ひつる事どもうかびいでゝ、そゞろに袖たゝならず。父君は小楠先生の國の爲につくし給ひし事ども物がたりきかせ給ふに、いとゞさま／＼の感心にうかびぬ。こゝの上は疏水なりときけど、時おくれたれば直に宿にかへりぬ。いたくつかれたれど富山にありし頃敎をうけし君のこゝの師範學校にいますもとに文いだす。又同志社に入れる友にもいだす。夕けをへて父君と共に三條繩手より京極にゆく。こゝは淺草あたりのごと、小さき芝ゐみせ物よせなど。さま／＼のものゝあつまれる處なり。家にかへりたるに、水の上の月いと淸し。うかべる影のさゞ波のゆらぐまゝに、くだくるさまをみつゝ、都の事ども思ふ。九日天氣よし。朝のほどは書どもよみゐて、ひる頃より車にて高臺寺にゆく。北野政所の世をのがれし後、たてられし處とぞ。政所の衣調度すべてあり。膳部はことにうるはしく、そのかみのさかえ思ひいでらる。石段あり。下よりみれば石のみ。上より見れば瓦のみといふ。まことにしかおぼゆ。豊太閤及政所の像あり。少し高き處に時雨亭傘亭あり。見わたしいとよし。こゝも萩の名所ときく。さて淸水にまうづ。いと暑くたへがたきをしのび／＼てやう／＼上にのぼれば、あだかも寫しゑのごとし。下に音羽の瀧あり、紅葉の青葉生しげりたる中より、水の流のみゆるさま、えもいはれず。はるかに嵐山みゆ。こゝよりは正面なり。昨日たのしかりし事どもおもひいでゝなつかし。歸さにいさゝか名物のすゑ物をもとめて、卅三間堂にゆく。ひろき一棟の内に千躰の觀音を安置せり。堂のうしろにいづるに弓ひきゐたる人あり。しばし見ゐたれど、遠ければにやあたるはいと稀なり。東福寺にゆく。小町

の井のくづれしあとあり。寶物の内に細川侯より一條家に御入嫁の時の御先箱を見る、いと美はし。紅葉の名ある通天橋をわたり、こなたの門を入れば御所車あり。寶物を見るに、吳道子の三尊佛及兆殿司のゑがきしもの、とり〳〵にいはん方なし。茶菓をあるじせらる。方丈を出で盤若堂に入る。山門に上れば十六羅漢あり。天井の龍の畫いとめでたし。かしこに見ゆるぞ、宇治淀八幡山なるなど、父君指ざしをしへ給ひぬ。豊國神社にもうで大佛にゆく。其名のごとくいと大きなり。はしごにてかしらの後をめぐりておりく。つりがねはた大いなり。打たゝきゐる人多し。やう〳〵つかまりてうつさまあやうげなりき。日暮て家に歸るに、あなたの座しきに舞子あまた來つどひて、いとらうがはし。水上の月はこよひもいとなつかし。十日朝とく雨ふる。父君はなにがしの君を音づれましぬ。晝けをへて東西の本願寺にゆく。雨つよくていたくこうじぬ。東は新らしく詣づる人多くて、賑はしけれど、西の方はさびし。家は西の方大いなり。つくりざまひとし。東の前なる噴水一丈あまりなり。烏丸通に出で高島屋にたちよる。父君の御たまものにて、衣かひて給はりぬ。いと嬉し。かへさ繩手の襟半にて、又何くれともとめぬ。夕つ方富山の師の君とひ來ましぬ。父母君と共に京の物がたり學校の事ども何くれとかたらひて歸りましぬ。

十一日、昨夜より雨つよくふりつゞきて、けさも猶やまず。前なる川の水かさいたくまさりて、勢いとつよし。そが中に魚などとりゐる人あるに、世はさま〳〵なりけりとおぼゆ。雨ふりて見にいでん事もかなはねば、宿の幼子を友として、金魚をみ、またをかしき話などして遊びぬ。もてこし少年世界かち〳〵山などのふみあたへつ。九才なりといへどいと愛らしくて、常にわが室にて玩物いだして遊びぬさまかわゆし雨の晴

間を待ちて、母君と共にはじめやどりし某君の許をとふ。さま〳〵にあるじまうけあり。つま君いとおもしろく何くれと物がたりせらる。都をどりの事語りいでられ、つくりざまによりて如何なる女も天女のやう見ゆなどかたらる。われらは一日おくれて見ざりし事、くちおし。夜に入りてかへりぬ。みそらの星いと多かり。明日は天氣ならむとうれし。

十二日いとよく晴わたりて、心地もすが〳〵し。母君わが爲にふりはへて茶のふくさ買にものしたまへる、御惠いと嬉し。はゝ君と富山の師の君の許をいふ。父母君の寫しゑあなたにかけてあり。寫眞ブックにはわが幼き時に寫しゝが挿てあり。又富山にて親しかりし友にも數多あり。いとなつかしとてくりかへしみつ。家にかへりしに、客人あまた來まして、いとまなし。はや京都にゐんもわづかになりたれば、都のつとにとて博覧會なる所々の賣店にて、何くれともとめてかへる。今夜は風少し身にしみて星の數いつよりも多し。」

十三日空よく晴たり。昨日より父君いさゝか御つゝがましつれど今日は御心地よく、いと嬉し。京の名所も大方はみめぐりつれば、今日より大坂にものさむと父君のたまふまゝに、荷物いそぎものし、こゝかしこに暇乞のふみなどいだして、いと心あわたゞし。六時ごろ家を出で、七條停車場にゆく。滊車は人多く乗りてかくべき所もなし。やがて走りいづ。右左ともに田畑にて、家路にかへる賤の男のおもわたのしげなり。くれゆくまゝに、あぜ道に蝶おふ里の子のすがたも見えずなりぬ。をち方の山のけしきもわかず成ぬ。唯しづの家居なるべし、一むら生しげれる竹藪のおくに、ともし火の見ゆるのみ。父母の君ともろ共ならざらましかば、いかに心細からましなどおもふ。又おもふにかねて山川のけしきよき處ときゝゐつる京都の大方はみつくしつれど、石山宇治あたりを殘しつるは口惜し

く、智恩院本願寺のおくに入らざりしも殘りをしかりき。さばれこれらはあまりふくつけき願ひなれば又をりもありなむ。唯父母君のあつき御惠に身も心も樂しく心地よけなるさまを、父母君のみまして喜びのふをみるにつけても。いとゞいそしみつとめて、此御惠の片はしにだにむくいまつらむと思ふのみ。さま〴〵思ひつゞくるほどに梅田停車場につきぬ。夜目にてさだかならねど、町のさま人のすがた、凡べて京都とことなりて東京に似たる所多くおぼえぬ。こは大坂と京都との人の心のたがへるによるならむか。車にて北濱なるなにがし樓につく。かねてしれる家なれば、おくまりたる方のいとひろき所に案內す。新らしくたてし所とて、いと美くしく便よくつくりなして心地よし。東京より來り居し書あり。母君と共によむ。

征衣の露

在臺灣　松翠生

露營の夜月に對して

軍裝せるそのまゝに　青葉のかげの草枕
假ねの床に見る空の　月の光りぞ身にはしむ」
思へば過ぎし夏の夜の　夕顏棚の下涼
さやけき影をたらちねと　ともに樂しくながめてき」
またしき友と打つれて　清き光りを仰ぎつゝ
加茂の河原の夕風に　たもと吹せし夜もありき」
はれてくまなき月かげを　今宵はいかにながむらむ
故鄕にゐますたらちねは　都の空の我友は」
照る月かげはかはらねど　かわるうき世ははてしなし
夜半の嵐のつれなくも　あすは屍の上やてらさむ」

歩哨に立ちて

みどり茂れる森かげに　銃とりもちて更くる夜を
守りてあればくさむらに　虫の音淸くきこゆなり

山田のおもをわたりくる　風も涼しくさそふなり
小河へだてゝかなたなる　岡邊の光りあやしやと
銃とりなほしながむれば　あだにはあらでさら／＼と
流るゝ水にかげとめて　飛びかふ螢の二つ三つ」

病ひの床

はるばる來ぬる旅の空　あだしやまひにおかされて
假家の床に短夜を　ながしとかこつ身ぞ哀れ」
はりさく胸のくるしさも　忘れて物や思ふらん
いくさの庭のそのさまを　故郷の空のたらちねを」
幕よりもるゝかけ清く　うさをかたろふ友もなき
枕べ近くおとつれて　まどかにてらす夏の月』

家政

主婦の位置

しばのや

一、世に主婦の位置ほど美麗なる職務はあらじ

二、其身の在るを打忘れて他の爲めに時々刻々斷間なく心配と勞苦とを犧牲するを其職務とす

三、日となく夜となく仕事を爲し又心配を爲すは其身の爲めにするにあらず皆家族の爲めにし夜は晝の勞れに打敗けて臥床に横はり新に明日の爲めに力を養成するも其身の爲めにあらず皆他の爲にして其夫、其子、其家族、其婢僕をして今日を樂ましむるにあり此の如く艱難なる生活を爲すも之が報酬としては只彼等が滿足なる面影を見るにあり

四、其身は其身の所有にあらで其運と幸と不幸とは往きには全く一面識なかりし人今は其生涯の伴侶たる夫の運と幸と不幸とに連結す

五、其夫か如何なる運を有するも之に滿足し、夫が貧困となれば共に其苦みを嘗め、夫が逐はるれば身は知らざるも其患を分ち、夫が疾めば之を看護し病者自身よりも多く心配す一として身の爲めにするにあ

らず皆他の爲めにす

六、母となりては其苦痛と危險とを以て生命を與へたる子の爲めに生活し他の人々は心を安んじ身を舒はすの時主婦は深夜にも愛兒の爲めに眠むる能はず若し病氣に罹りあれば其呼吸にも注意し心中には潜に之が回復を祈る誰一人として母の爲すことを知るものなく誰一人として母の惱む處を知ることなく只萬能の眞神のみぞ之を知り給ふ

七、主婦となりては他の爲めに思考を運ばせ其身が病床に臥すも他人の健康に注意を爲し其身が保養を爲し歡樂を要するも先づ其家族の者が之を受くるに注意す

八、主婦は「ホーム」に於ける平和の神使なり「ホーム」の順序と幸福の有形なる守護神にて最大と最小のものにも注目して一ゝ之を忘るゝことなく愛と母の注意とにて總てを包括す

九、主婦の職や單純なるも影響する所深厚にて愛を以て奉公する巨標本なりと云はざるべからず假令男の力は半世界を震動することあるも良好なる主婦が恭謙他の知らざる間に盡すほど直接に熱心に永久に愉快ならしむるものありや

十、主婦の品行方正なるは家族の巨標本にて其宗敎心は行爲を益ゝ高尚ならしむ

十一、其子も感化を受けて敬神の心を起し會堂にても靜かなる寢房にても神を信ずるに至らしめよ

十二、主婦の心情清潔なれば此世の人々が如何に不潔なる慾情を以て交際し來るあるも天性の廉潔にて之を破ぶるを得

十三、心情の清潔は婦人の貴重なる装飾品なることを知れ一度之を失ふあらば幾多の寶石を飾り金製の美服を纏ふも之を復するを得ず

十四、其心情の清潔に、假令薄きにもせよ蔭影を生ず

るの光線は避けよ

十五、行狀に嚴格なれば家族も主婦を尊敬し言語と實行とにて之を示せば其子の心中にも之を感染せしむ

十六、經濟を知れ主婦が儉約にて貯蓄せしものこそ主人が得たる眞正の利益なり

十七、婢僕の心は親愛にて收め之を指揮することを知れ彼等の心中に尊敬を惹起せしむれば從順を生ぜしめ怠惰者も其義務を盡すに至る

十八、能く家事に注意し「ホーム」の生活を快活ならしめ其夫其子が心を他方に向けず常に主婦の周圍より離れざる樣爲すべし

十九、以上の總ては怜悧なる賢き主婦にのみ盡すことを得

二十、諸人に對して慈悲深くあれ美麗なる親睦と相互の信用を破ぶるが如き事を避けよ

廿一、其愛する夫に對しては秘密を有すること勿れ假令過ありとても夫の前にては隱すこと勿れ僅に一度夫の信用を損するあるも數年間之を復することは難きものぞ

廿二、其子に對して慈愛を與へよ眞神の主婦に與へたる者なれば之を愛するは當然なりと雖ども之を濫用するあらば却て其子を柔弱にし或は甘へかすことあり

廿三、婢僕に對して高ふることなく、媚ひることなく彼等の愛と好意と從順を得ることを專一とせよ

廿四、其他親族と交通する人々に對して能く交り假令家族中の一人は他に對して不快を與ふることありとするも主婦の愛と親睦は之をも遂に和解するに至る隣人とも一致を爲し內部の平和が他よりの後言に依りて破壞せられざることに注意せよ

理想的家屋

人は食物、衣服の必要なるが如く、家屋も亦人生に最

も必要欠くべからざることは、こゝに吾人が改めて言ふまでもなし、然に家屋の建築につきては種々の區別あり、日本人の瀟洒淡泊なる家屋は一種の建築法なり、西洋人の嚴肅荘重なる家屋は一種の建築法なり、アイヌ土人も一種の家屋建築法を有す、エスキモー人も一種の家屋建築法を有す、然らば吾人が所謂理想的家屋なるものは、何を標準とすべきや、吾人が所謂理想的家屋なるものは經濟と衛生に便宜なる家屋の構造をいふなり、これより吾人が説く所のものは、吾人をして理想的に家屋を構造せしめば正に斯の如くすべしと其標準を示したるものなり、東京の如き人烟稠密紅塵萬丈の都會の地にありてはなか／＼自分の思ひ通りの家屋を建築することも、又は借家をすることも甚だむづかしきものなれば、家屋の撰擇に於て成るべく吾人が標準とする所に注意せられ又地方の人士は自由に家屋建築の便あれば、吾人の説と同一の意見を有せらるゝ人あらば、其實行を望むものなり。

家屋を撰擇するにつき第一に心を用ゆべきは、空氣の事なり、空氣の必要なるは飮食物と其の優劣あるを見ず、人は食物なきも一週間位は生存し得べしと雖も、空氣なきに於ては十分間も生命を支ふる能はざるにあらすや、故に空氣は家屋に十二分に其流通を適宜にすると共に新鮮ならざるべからず、空氣は家屋の如き覆塞したる内にては、啻に塵埃等のために汚染せらるゝのみならず、家人の呼吸によりて亦腐敗す、故に家内の空氣腐敗せず常に流通に宜しき家屋を撰ぶを要す、英國の某醫博士曰く、人若し予に腐敗せる食物と腐敗せる空氣と孰かを撰ぶべしと强るものあらば予は寧ろ腐敗せる食物を取らんと、以て空氣の忽諸に附すべからざる所以を見るべし、常に田畝に在りて耕耘する農夫と常に製造場に作りて作業する職人と、其軀格の强弱、生命の長短を比較せば一目瞭然たるが如く、全く

空氣の善悪によりて其差を見るに至るなり、鳥類の如き其發達の速なると其淫慾の熾なるものなりと雖も、其生命の割合に長きは、全く彼等が常に空中に飛翔して、新鮮なる空氣を呼吸するに別ならず、而して家禽其他高く飛翔し能はざる鳥は、他の高飛鳥に比し概して短命なりといふも、全く空氣に其原因を歸せずんばあるべからず、空氣の效用くど〱しく説明するに及ばず。

羅馬人の諺に日光の來らぬ所には醫者が來るとあり、吾人の生存上空氣に亞ぐものは日光なり、何となれば光線のあらざる所は如何なる生活物も、或は萎靡し或は死没す、見よ日向と日蔭の胡瓜とには其生育上に非常なる差ある如く、人間にも日光に出でゝ働く人と日蔭にて一生を過す人とは其顔色を見ても、直ちに判別し得るにあらずや、草木の枝葉の端の如き必らず日光に近き方に向き（則ちひまはりの花の如きは殊に其著じるしきものなり）又室内に花を挿しても、其花の表面に座席の位置に拘はらず、自から日光の射入する方面に傾くものなり、亦以て光線の必要を知り得べし。詩人は言ひぬ、千草萬木の花よりも、人間生活の花ほど日光を要するものはなしと、則ち諸植物の暗黒所に在つて生育の悪しきと共に人類の生育に在りても其日光を受くること不充分なれば、蒸氣を減じ、或は貧血症を起して身心ともに衰弱に至る、殊に小兒の如きにありては其の最も著しく發育に妨害あるものなり、且つ日光の及ばざる場所には、常に濕氣充ち寒氣はびこり諸種の害毒を釀成するものなり、其一例を世界の人種の上より言へば熱帶地方野蠻人の概して徒足裸躰なるも、其容貌骨格强壯にして、到底北方寒國人民の企及する所にあらず、露國の小兒の多く貧血症に罹る所以は、重に日光の不足に歸因するなり、以て如何に日光が吾人人類の生活上に大勢力を有するかを見るべ

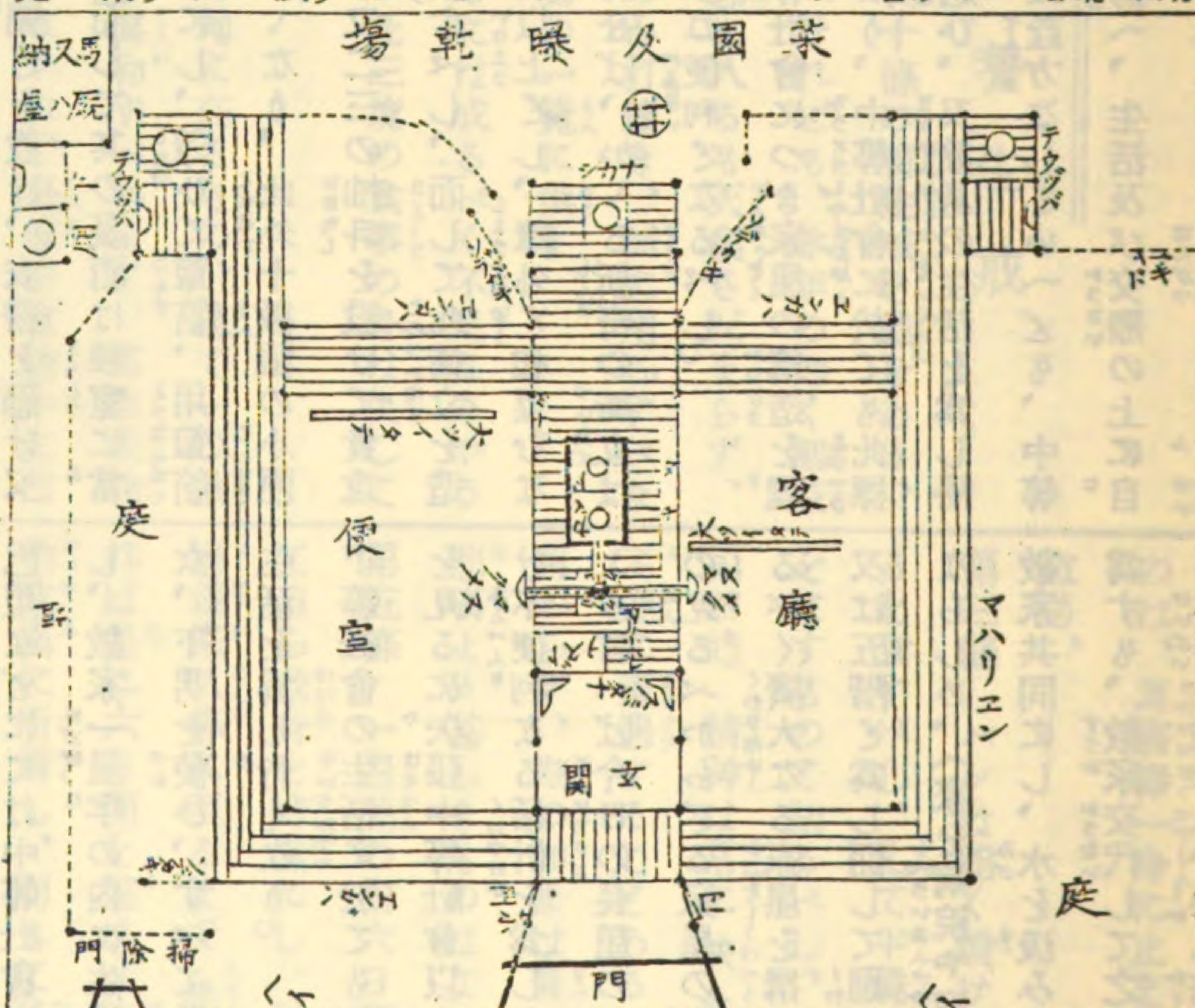
し。

さて吾人は人類生活上に最大必要なる空氣と日光の事情を略說したれば、これより如何にして家屋を搆造すべきかに及ぶべし。

家屋の地所は成るべく高燥の地を撰ぶべし、例せば東京市内ならば、麹町區、赤坂區、麻布區、本鄉區、牛込區、四谷區等は俗に山の手と稱して、京橋區、日本橋區、神田區、淺草區、芝區、本所區、深川區等の低地に比し兎に角高地なり、單に衞生的より言へば以上述べたる山の手は高燥の地にして空氣の流通宜ろしく、炭素、窒素、瓦斯、塵煙等其他有害なる鑛物質、有機物質を混同せず、又衞生的或は學理的より言ふ時は、日本造りと西洋造りとを問はず、清潔にして快活なるを撰み、家屋も新しく床は高く、床下は風通しを能くし、家屋の周圍には瀦池、沼澤、溝渠等を避け、諸種の製造所、又は工業場又は停車場又は魚鳥市場の近傍を避け、及び其の周圍に大建築又は高塀あるを避け、四邊は四時の草木を植えて空氣を清新にし、かねては眼目を樂ましめ、堅牢に溝渠を通じて遠く汚水を導き去るの方針によれば先づ完全なりと雖も、人々の業務の種類と生活の程度を量りて後にあらねば、遽に實行し難し。

然れども吾人が常に注意すべきは、空氣、日光にして之に亞げるは水なり、されば第一空氣の流通宜しき家屋を撰ぶべきは勿論にして、家の三面少くとも家屋の二面よりは空氣と日光とに面し、又空氣と日光に面する方位も東向又たは西向又は南向に取りて北向を防ぐべし、井戸は臺所に近からねば大に不便の處あれば、接近するも詮方なしと雖も、流元の汚水は成るべく遠く導き去り、便所も母屋と遠隔するが衞生上の旨に適へども、人々の生活の程度と家屋の工合により望の通り行かぬこと多ければせめては臺所と接近せぬやうにし

たし、爰に某家屋通の理想的家屋の話を聞き、吾人も同感なれば其構造法を諸君に披露すべし、先づ塀（板塀にても生垣にても土塀にても築地にても其人々の嗜好に任す）を以て取り圍み、正面に門を置き玄關に至るまでは敷石を敷き、玄關の左右には木戸ありて外庭に通ぜり、竈は家の中央にありて一は飲食の料理、一は冬季に室内を暖むる用に供するなり、其摸型は挿畫によりて示さるゝ通なり、兩側の庭には樹木を植ゑ小兒等の運動場とし、後庭は菜園として主人又は主婦其他



家人が園藝を試むべき場所となし、かねては衣服等の乾場とすれば樹木はなきを宜しとす、さて圖中居室と客廳にある大衝立は、其位置の移動に從ひて一室を兩分し、又は隨意に室の廣狹大小を爲さしむるの用に充て、頗る便利の工夫なり、其幅はこの室の横徑と同一ならしめ、一方の端に一の耳門を設けて往來に便にし、且つ扉扇を設けて開閉自在ならしむべし、而して其の客房に用ふるものは、普通の衝立の製にならひ、又相當の粧飾を施すを可とす、其便室の方に用ふるには、

其表面は薄板を釘附けて外面に壁紙の類を貼つけ、其裏面には數多の衣裳懸と懸棚とを設け、衣帶を懸け又は家什を藏するの便にす、而して其の裏面は寢室に當て、衣服、調度の取措を便にし、隨ひて簞笥、用簞笥等を備ふるの手數を省かるゝなり、此外十數個の小匣を件の懸棚に載するに充て又二三の抽斗を設けて貴重の物品、緊要の書類等を藏すべし、而して此衝立を造作せんには、其高さを六尺以上とし、障外と相望むなからしめ、又其轉覆を豫防せば、かゝる新奇の衝立は家屋の緩急に應じ一方ならぬ便利となるべし。

右は中等社會以上寧ろ上等社會につき家屋の搆造を理想的に畫き出したるものなり、中等社會に於ても此標準に依らば經濟と衛生に適ひ、又簡易の生活を爲し得らるべし、今日上等社會は詮方なしといへども、中等社會にて相互に城廓を搆へ、生活及び交際の上に自家と他家と圓滑ならず、これが爲めに煩雜にして不經濟なる生活を爲すは甚だ惜むべし、華麗を競ふ佛蘭西巴里などにては中等社會の生活は大抵共同の生活を爲し、數家一屋宇の內に生活し、數家共同して一人の下女、下男を使ひ、すべて時間と秩序を以て最も簡易に生活を爲し行くなり。

下等社會の生活に於ても且つ然り、我國の長屋の住居を見るに矢張中等社會以上と等しく相互に城廓を設け不便利なる活計を爲し行くは愚策なり、吾人の主義より言へば今日の長屋の如き不潔不完全にして外觀の見るべからざる家屋の搆造を廢し、之に代ふるになるべく廣大なる家屋を搆造し二層階、若しくは三層階又は五階と爲し而して廻廊等を設け互に往來するに便ならしめ、(家を病院や宿屋生活の如く)飯を炊くにも數家共同にし、水を汲み火を燃し、買物を爲し掃除を爲すも、數家交代して之を試みなば時間と勞力と金錢の經濟を得べし、併し斯の如き家屋搆造と生活の改革

を實行せんには、長屋社會の智恵と道德とを進步せしめざるべからず。

十條の養生戒

古き西洋の家庭雜誌に十條の養生戒を載せあり、誰も能く知る處なるべけれども、本年の如く惡疫流行し、殊に土用の節に入るも天候さだまらず、じめ〳〵として降雨のみ打續き、誠に用心すべき折柄なれば錄して諸君の一覽に供す

第一條　三度の食事をするには成るべく不足なきやう遠慮なく食ふべしと雖も、此三度の食事の外は決して間食すべからず、

第二條　高く天に在り低く地に在るもの、總て一の象を成せるものをパンの中に混和すべからず、其他或物形に擬したる菓子類を食ふなかれ、是等の食物中には多く土質を含有するが故に、之を喰ふときは、必らず不消化の病氣を招くものなり、而して不消化病なるものは、其害毒一身に止まらずして子孫三代に及ぶものなり、

第三條　パンは能く燒けたるを擇び、飯は能く蒸れたるを食すべし、凡て半燒半煮の食物は著しく胃に害毒をなすものと知るべし、

第四條　精神は常に快活なるを要す、借令一朝不幸不運に遭遇することあるも、過度に無益の悲嘆に沈む可からず、斯の如きは最も身心を損ふなり、不養生は悲嘆より甚しきものはなし、

第五條　一週間の內六日間は每朝よく其の體軀を拭ひて自ら我身を淸潔にし、每七日に一回、其妻子を始め、婢僕家人等に至るまで悉く沐浴せしむべし、何となれば是れ六日間を經れば躰軀に發汗するに隨ひて汚穢物皮膚に附着し、而して恐るべき「バクテリヤ」の其中に發育するの恐あるべければなり、男子は殊に必要な

り、上帝は此の身體清潔法を行はしめんが爲に多量の水を我人類に賜ひぬれば、其價は極めて廉なり、

第五條　便室並に寢室は時々前後の戶を開きて空氣の流通を自在にすべし、空氣は多量に之を使用するも一錢一厘の價をも償ふことを要せずと雖も、其効用に至りては極めて莫大なり、

第七條　火熱未だおさまらざる菓子麵包を喰ふべからず、

第八條　油煎（フライ、カツレツの如きもの、我國に言へば天麩羅のごとき油煎なり）の肉を喰ふべからず、

第九條　過度の勞働を爲したる後又は之を爲さんとする前にありては、決して粗嚼の食を嚥下すべからず、又た多量の香料類を用ゆる勿れ、是等は大害を胃部に釀成するの基となるものなり、

第十條　たま〳〵鄰人又は友人の家に遊ぶことあるとも決して、深夜に及ぶべからず、殊に其家人下婢等と共々に骨牌遊戯に耽るが如きは、堅く之を嚴禁せざるべからず、夜間の長談話は啻に他家に迷惑を感せしむるのみならず、自身の身體に大害を釀すべきなれば、夜間は成べく早く寢ねて、晨には太陽の昇ると共に起き出で、各々其職業に勞作すべし、

以上の十個條は歐羅巴の或田舍にて行なはるゝ養生法なりといふ。

自製の味噌

節は漸く土用に入り味噌を造るには倔强の時候となりぬ、東京の生活にては住家思ひのまゝならざれば自家にて味噌を製すること容易ならず。それよりは、酒店に就けば早分りするやうなれど、實は不經濟にして、且つ自家製作のものは第一淸潔、又製作宜しきを得るに於ては其味も遙に賣品の上にあり、されば茲に味噌の

製作九法を示さん。

(一)赤味噌　赤味噌とは我々が毎朝おつけの原料となるものにして、殆ど毎日使用し需用頗る多きものなり此の製造法は大豆を水に浸し、二時間を經過したるのち、之を釜にうつし豆一斗に水一斗二升にて能く〳〵之を熟煮し、十分軟柔になるを待ちて釜より取り上げ臼に入れて能くつき、三年も貯ふる積りならば麥麹一斗と食鹽五升を加へ、又能く舂きて桶に入れ、其蓋を密封して一過間を經なば之を使用して差支なし、これを七日味噌といふ、桶に入れたる後、油紙をもて其上を覆ひ置かば、決して黴などの生ずる患なかるべし。

(二)白味噌　これは大豆一斗を水に浸し、やゝほとびて豆の皮のしはむだる時、束縄もて之を揉み皮を離し水三斗を用ゐて之を煮立て、一沸して皮の全面に浮ぶを待ち、其皮を除き去る時は、豆は全くむけて純潔となるなり、之を煮過さゞるやうに煮て豆汁を去り石臼にて舂き大團子となし置き、米麹一斗六升鹽二升五合(冬季は少しく鹽の量を減じても宜し)を混和して又能く搗きまぜ、桶又は瓶に藏めて密封し、凡そ一個月を經過したるのち使用せば其味美なるを得べし。

(三)糀粏味噌　大豆をざつと煮、其熱氣あるに乘じて擂鉢に移し能く擦り醬油を少しづゝ加へて製するものなるが、久しく貯藏しがたしといへども其味一寸面白し。

(四)糠味噌　茲に糠味噌といふは胡爪や茄子をつける通常の糠味噌とは大に趣を異にし、これは糠味噌其者を食するものなり、則ち米糠を水にてかたく捏ね、甑にて蒸し熟したれば、火を焚き捨てゝ其まゝになし、翌日取り出し、糠一升に鹽一升五合及び醬油の滓を適宜に加へ、臼に入れて能く搗きまぜ、桶又は瓶に入れ密封し月を經て取り出し、又臼に入れて搗き、元の通り器に入れ置きて用ゆれば面白き味あり。

（五）五年味噌　大豆、麹、酒糟、米糠各々一斗にて製造するなり、先づ大豆を煮、米糠を炒りて加へ、麹、酒糟及び鹽を入れ搗き合して製するなり、又或人の言によれば、米糠一斗に大豆五升を煮て搗き混ぜ、鹽三升、醤油の滓三貫目及び酒の糟適宜に和ぜて桶に藏め用ゆるなり、これは上流社會は使用せずと雖も中等以下には最も平民的なるものなり。

（六）銀山寺味噌　これより以下は少し風流なる味噌の製造法を示さん、銀山寺味噌とは如何なる點より得たりし稱なるかは知らねども、これを製せんには大豆一升を炒りて磨り割り、其皮を除き粗きと細きとを篩に分け、大麥一升を能くしらげ、洗ひ清水に一夜が間浸し置き、大豆の粗き末と混合して蒸し、細末と混じ土室にねさせて麹となし、其花の生ずる一日前に四個に割りたる茄子と香物程に切りたる越瓜と各一升許に鹽四合を加へ、桶に漬け壓石をかけて、翌日上に出たる液汁を取りて之を浸し、瓜茄子をちいさく切りて入れ混ぜ、桶に入れて壓石をかけ置き、毎日二三回も攪きまはし、十日程も過ぎ山椒、山蓼、紫蘇等其他嗜好の品を適宜に加へ、又壓石をかけ置き、二日に一度つゝ攪ぜ二個月を經過して後食すれば、所謂銀山寺の味を得べし。

（七）阿蘭陀味噌　牛蒡と鯣とを細に刻み、胡麻油にていため、赤味噌を入れ、味淋酒の少量を加へ、焦げつかぬやう文火に攪きながら煮つめ、卸ろし際に粉の胡椒を入れ置かば、永く味の變することなし。

（八）時雨味噌　蛤のむき身を笊にて篤と洗ひ砂を去り、から煎して水氣を取り味淋酒及醤油を加へてカラリと煎りつけ、極上の赤味噌を程よく入れ、銅鍋に移し、遠火にて攪きまはしつゝ煮つめ、冷して器に盛り、割山椒を炒りて振りかくれば面白し。

（九）常盤味噌　柚子の黄みて實入よきものを取り、之

に十文字に庖刀を入れて實を扱ぎ皮のみを取り日に曝して貯蓄し置き極上等の赤味噌を擂鉢にてすり、之を水嚢にて漉しやがて椎茸の莖を去りたるを水に浸して絞り、右の柚子の皮も亦湯に浸し置き、共に細く刻みて加へ、味淋酒にてとろ〳〵と焦けぬ樣に煮めて、冷して胡椒を炒り皮を去り、山葵を短冊に切りて入るれば面白し、生柚子ある時候ならば生にて入るゝも可なれど、永く貯へ置きがたし、又味噌かたくして擂り難きときは味淋酒を少し加ふべし、右に製しあげたる所謂常盤味噌は田樂、湯豆腐などに用ゐて頗る妙なり。

手藝案内

造花術

繪具——夫れ四季折々の花卉草木には千種萬別あり、花と言ひ草といひ、各々其性によりて色を異にするを以て、造花術に於ても及ぶだけ其天然の色に似たる色采を用ゐざれば眞に迫るの妙を得るを難しとす、されば繪具は造花卉に最も必要なるものにして、花瓣、葉、蕚等を染むるに用ゆるものなり、さて繪具と言へば五色に限れるが如く聞ゆれども、其種類極めて多く、殊に近來は染料非常に進歩したれば、色は單一に限らず、種々の混合色を出しゝかば、色の數は限りなきに至れり、造花術に用ゆるは、瓣と言ひ、葉と言ひ、花により、木により、草によりて各其色を異にせざるべからず、されば其色數ふる遑あらずと雖も、普通用ゆるところのものは下の八九種にして、此種類を混合して適宜の色を出す、則ち「ませんだ」は蝦茶の色、「あをたけ」は萠黄、「をうらみん」は赤を帶びたる黄色、「きこ」は黄色、「みしりん」は藍色、「ふろくしん」は赤色、「あたりん」は黒味を帶びたる赤、「ゑるろう」は「むらさき」は紫色、此の外種々の色あれど、其は繪具屋に就き造花に用ゆるものなりとて求め玉はゞ事足るべし。」

繪具を溶解するには陶器の中にて温湯にてすべし、又染むべき品の大小と多寡によりて繪具の料を加減せざるべからず、無暗矢鱈に澤山溶解するに於ては望の色を染むることを得ざるのみならず繪具大に不經濟となるべし、併しこゝにて何匁と一定するも詮なし、たゞ其人の考にて丁度其染品に宜しき程の繪具を解かすやうにすべきなり、繪具を濃くとかし置きて瓶に詰め置き、入用の節二三滴づゝ出して使ふもよろし。

前にも言し如く染出すべき色合は種々様々にして、なか〳〵右に述べたるは九種の染料にては事足ず、是非とも混色則ち色合せを爲さゝるべからず、これは獨り造花に限らず、其他の美術品製作にも同様なり、されば造花術を學ぶにも、此の繪具の合せかたを知るは、是亦一個の術にして、いろ〳〵工夫を爲し、幾度となく少しづゝ色を合せ試み、實物と同じき色の出るやうに工夫すること甚だ肝要なり、さて其の合せ方はいろ〳〵の方法あれども、其は此道研究者が追々功者となるに隨ひ出來得るものなれば委しく説くに及ばず、例せば一般普通に行はるゝ合せ方を記さんに、普通の葉を染むるには、「ませんだ」（則ち鰕茶色）と「あをたけ」（萌黄の色）を半々に合せ染むるを要す、其分量は手覺に隨ふべし、花、莖、蔕等の色其實物同様なるを撰むべし。

而して繪具染めやうは、其内へ染めらるべき布帛又は紙類を入れ浸すべし、其の浸し置く時間によりて色に濃淡あるものなれば、紙又は薄き布帛類は短時間（例せば一分間）稍厚き布帛類にては稍長時間（例せば五分間）を要す、此道の人は能々時間に注意し、時々「ピンセット」又は箸を以て摘みあげ見るべし、又造花は乾したる後の色を用ゆるものなれば、染料により濡色と乾きたる色と異なることあるに氣を注け、其乾きたる色を見るには、豫め小切を染め乾し試み見るべし、

又た色合を同様に染めなすには溶液中に於て能く振り動すべし、すべて葉を染むるには最初「あをたけ」にて染め獅子を張り、白粉は姫糊を和したるものを塗り、乾かしたる後に其上に適宜の色を塗るを要す、又花瓣の半ばを染め、其色際はぼかさんとならば、先づ其布帛を水にて潤し、後染料溶液中に其端を浸すやうにすべし、茲に一言注意し置きたきは、染料によりて有害なるものあれば、手顔又は口に附けざるやうにすべし、其の有害なると否とは繪具屋にて聞き置くべし。

染めたるものを乾すにも意を用ゆべし、キヤラコを染めたる時は、程能き色合にて掛竿又は繩にかけ乾すべし、天日にかけて乾すは大概は宜しけれど蔭乾にせねばならぬのもあり、又時によりて火熱の力によらざるべからざるもあり、火熱は能く變色の患あるものなれば、豫め小切にて變色の有否を試みなば、アトにて後悔することなし。

香氣——造花に香氣を持たしむるも亦造花術の進歩なれども、未だ此流行を見ず、然れども眞個に天然の花に擬せんとなれば香氣もつくるやう工夫ありたし、花の香氣にはいろ〳〵あれども、未だ今日の所にては其花に等しき香氣を持たしむることを發明せざれば、適當なる香水をえらみ紙などに浸し、簪の如きものならば、其紙と共に筺中に盛り貯ふるに於ては、其の使用するたび毎に香氣を保つべし、其他の方法は、繪具を香水にてとかし染むるか、乃至は香水を少量の綿に濕め、花心のうちに藏め置くも面白からんか。

まとめかた——まとめかたは造花術に於て第一の技倆を要するものなり、挿花などは形が大なれば左程面倒なる術を要せざるも、花簪のつまみ製の如きに至りては極めて精巧を要するものなれば熟練の域に進まざれば爲し易からず、次に蘂、瓣、萼、蕚、幹、葉、枝等のつけやうの大畧を記さん。

造花術に於て其纒めかたの第一は蘂なり、蘂は能く人の知る如く花の中心にして幹の取り付ける處なるが故に最初に纒め出すなり、其のまとめかたは物によりいろ〳〵なれど、菊の花を以て示すべし、菊の蘂の如きは木綿糸を多く用ゆ則ち適當なる木綿糸と銅線と二三遍ねぢ、綿糸のみを二つに曲げ、其下を銅線にて四五遍まき固め、後兩方より銅線の兩端を蘂の上にかけ取り、後又其兩端をよりて、幹の心とし、或は他の幹に取りつくるなり、椿の蘂を紙にてつくるを以て、心には綿をまるめ、銅線にてむすび固め、其線に黄紙を櫛の歯の如くに切りたるものを捲きつけ置くなり、糸を用ゐて其蘂となさんには、カタン糸に糊して適當の長さに切り、紙の上に一々並べ、糊付として其紙を心に捲きつくるが如し、其他の各種の花に至りては其物々に就きて說明すべし。

瓣の寄せやうは大に花の善惡にかゝはるものなれば、能々意を用ゆべし、花に單瓣重瓣あるが如く人工の花に於て其通りに學ばざるべからず、たとへば菊花の如きは瓣の多きものにて、又瓣の出方の正しきものと正しからぬものあり、其の重りかた一樣ならず、いろ〳〵に變りたるものあれど、大抵は三瓣乃至五瓣より成り立つものなり、梅や、櫻や、海棠や、牡丹や皆なこれ五瓣を以て成り立てり、而して瓣を寄せるには蘂に第一重より次第に姫糊を以て貼りつける、其の合せかたは成るべく實物に依るをたよりとす。

瓣を蘂をつけ終りた後萼をつけるが順序なり、萼には紙、天鵞絨などあれど、實物に從ひ適當の色に染むべし。

萼はゴム製なると厚紙にて製したるものなるが萼の下につけるものなり、花によりてあるとなきとあり、薔薇の如きは大なる萼あり。

幹のつけかたは普通のものは、花の本より出でたる銅

線に、其の草木の幹色に染めたる紙を捲くなり、此の外ゴム製の細き管を用ゆるもあれど、其中にも矢張銅線を通し置くがよろし。

葉のつけやうは葉に附着したる銅線を幹の銅線に添へ、共に其上に紙を捲くなり、またゴム細管を用ゆるとならば、其細管に小孔をうがち、葉の銅線をさすべし。

枝のつけやうを記する前に枝の製作をいはざるべからず、さて枝の製作は一寸六かしきものにて、たとへば梅枝の如きものにても其一枝を作り出さんには、其色合といひ其氣韻と言ひ、其風骨と言ひ實物の如くならざるべからず、斯の如きは初心者には頗る容易ならぬ業なれど、熟達の上はいろ〳〵に工夫し得るなり、目下の處にては木に屬するものは其實物の枝を用ゐ、草花に屬するものは細竹を心とし、其色に擬ふたる紙などを捲き用ゆ、菊の如きはゴム細管の細大各種を用ゐ、或は女竹は寒竹の生立を用ゐ其上に紙を捲くこともするなり。

以上に記したるものにて造花術の大概は終りぬ、これより一花一木一草につきて其造り樣を記さんと欲す。

あせとり

あせとり則ち夏襦袢は必要なり、夏は不斷自宅に居る時はあせとりは不用なれど、外出には必らずなからざるべからず、其製作は冬襦袢の兩袖のなくしたるまでにて、丈を二尺仕上りにすれば前後兩身ごろ木綿巾八尺、之に二寸五分のゑりかたを開け、一尺五寸の同じ切にてかけ襟をつくれば都合木綿巾九尺五寸位で出來得るなり、布帛地は金巾よりも日本製の木綿晒か、木綿ちゞみか、左なくば麻を用ゆるなり、併し木綿ちゞみは能く汗をはぢく割には着心悪しからざれば、木綿ちゞみ最も宜し、下等にて一尺一錢六七厘より上等ならば一尺二錢七八厘ならば此上なし。

日用品物價（八月二日ヶ改正）▲一等白米七升二合（二合高）▲二等白米七升四合（二合高）▲三等白米七升六合（三合高）▲四等白米七升九合（三合高）▲五等白米八升三合（三合高）

雜録

東京府下の女學校

●女子獨立學校

◎位置　東京市四谷の外半里許り、南豐島郡角筈村（百番地）に在り。周圍頗ぶる閑靜なれども諸般の便宜は新宿等の諸街にて達するを得べし。

◎建築　質素清潔にして岡を負ふて立ち、樹木の蒼々たると、土地高燥にして開豁なるとは、共に心肉の修養を助くるに足る。

◎目的　普通中等の教育を授け、同時に女子自からを支ふるに足るの職業を學ばしむるにあり。

◎歴史　初めは櫻井女學校（今の麹町區上二番町女子學院）の分校として、六番町に小さなる一家を借り受け、十三人の生徒、半日職業を營み、半日同女學校に出校して學業を修めしが、去る明治廿一年此の所に移し、熱心なる加藤とし子（前代議士加藤勝彌氏母堂）の盡力と、有志婦人の寄附とに由て、諸般の困難を犯して獨立し、今日に及びたるものなり。創立日尚ほ淺ければ未だ僅に三名の卒業生を出し、三十名許の生徒を有するに過ぎざれども、其の性質の上より見れば、確實高尚にして職業學校に匹するの價値ありと謂ふべし。

◎主義　熱心なる基督信者加藤とし子の下にあるとなれば、其の基督教主義なるは勿論なり。生徒に對しては頗ぶる自由なれども、全校の生徒何れも斯教を奉じ、又た當時無實にして名を汚す基督教主義女學校の比にあらず。

○風儀　亦た善く肅んて基督教主義の實を收め得た

り。監督法の如きは、校長始め有志の最も注意する所にして、今は頗ぶる周到せるが如し。半は職業を授くるの學校にして、善く斯の如きを得るは、蓋し此の校の特點と謂ふ可きか。

◎學課　學課を大別して豫備科、本科となす。從來入學者の資格として定まりたる所なかりしも、豫備科へは尋常小學卒業以上の學力あるものは入るを得べく、本科は高等小學卒業以上の學力を有する者にして入るを得べきが如し。兩科とも修業年間は各三年にして、修身、和漢文、英學、數學、習字、地理、歷史、理科、圖畫、音樂唱歌、體操の學科と、和洋裁縫、編物、刺繡等の手藝科あり。本科には又割烹術の敎授あり、家政學、敎育學(但し第一年を除く)の敎授あり。本科の和漢文科には、

日本外史、十八史略、古文眞寶、徒然草、土佐日記、古今集、作文等

あり。英學科にては、豫備科に於て、第一リードル及び讀書、會話より始めて、本科に至り、

萬國史、地理、地文、文典、

等を授け、其の他會話、作文、抽讀、譯讀、會話、作文等の科あり、數學は豫備科に於て分數に始まり、本科上級は代數にまで至る。(其の他は畧す)。別に幼年科なるものゝ設けあり。尋常小學科程の敎育と幼稚園の敎育とを授く。

◎經費　入學の際束修金は壹圓にして、授業料は每月壹圓なり。寄宿料は每月三圓なれば、一ヶ月六圓位の費用にて留學するとを得るならん。

◎校長及び敎師　校長は即ち加藤老女史なり。敎師は本邦人五名、外人二名にして、本科生徒も各々敎育の任を負ひ、幼年科の如きは全く彼等の手に由て敎育され居れり。

南　信

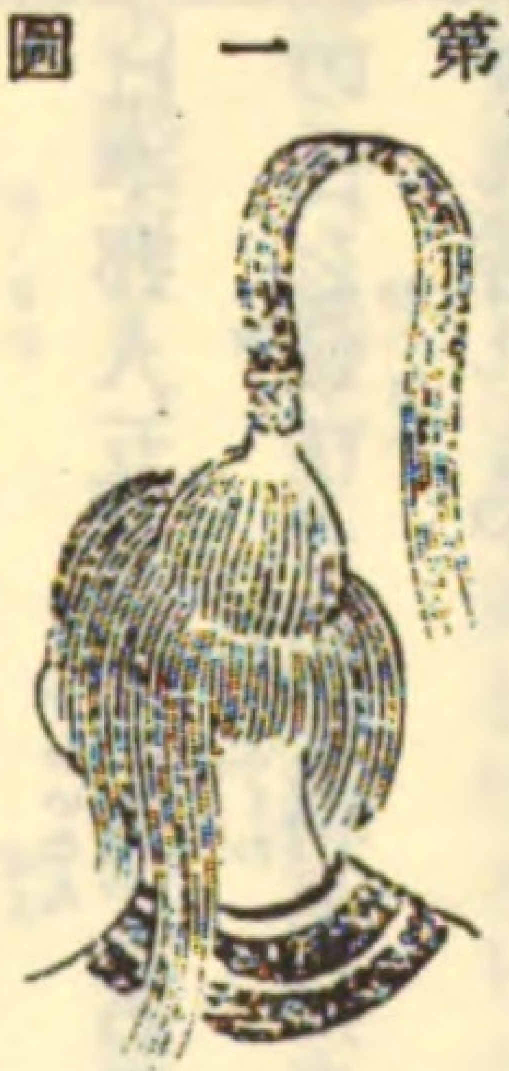
婦人の頭髪

在台灣近衛歩兵　久留島武彦

前便には靴の事を申し上げ候らへば今便にはずんと時節柄押し上せて頭の事申し上ぐべく候洗ひ髪の好敷折に油べた〳〵の台灣風隨分鼻をつく次第とは存じ候へ共まづ較べて御自分の頭の冷しさを御存じなさるゝ一助にかなど〻下らぬ事はさて置きていよ〳〵左に臺灣風俗頭髪の結方初まり〳〵

臺灣全島は見渡さず候らへ共先づ大別して二様といたし申すべしハツクロ種族のハツクロ風はハツカ種族のハツカ風と、抑も此處にハツクロ、ハツカと申し候ふは臺灣移住の支那本土人民にてハツクロはハツカよりは比較的北部の民に御ざ候ハツカは多くアモヒ邊の民の由にて此の二種族臺灣全島の支那分子に御座候

ハツクロ種族の結様は甚だよく我國の田舎に一時流行をたくましふせし牛の糞風の束髪に似居り候總躰毛を後頭によせて第一圖の如くに組紐にてしめ而して頸元につかんばかりに根低く巻きつくるものに候然れ共彼等の襟は自然に圓く頸なりに作られあり候らへばいくら根はひく〻も襟に支へる等の憂は無之其の上、圖の如く襟元は長き毛をのこさずそり上げし上に短かく切りたれば我國の婦人の後れ毛むしや〳〵としたるとは大に趣を異にし暑くるしき土地柄には至つて似合しき風と存ぜられ申し候而して巻つけたる毛は圖の如く一本の金屬製の笄の爲めにしつかりと押へられて頭にくつきりと引つ付き居る樣に御座候此の笄は必ず彼等の結髪には無てならぬ必要品に候ふより従つて飾り及び品



第一圖



第二圖

質も其の貧富に從つて色々にて貴きは金銀をつかひ貧敷は黄銅にて忍び其の表には種々から草樣のものを彫刻しありて先づ頭髮第一のかざりとなるものに御座候なほ此の上に間々網を掛けたるものも見受け候これは殊に臺北附近に多く候らへば或は外入より傳へられしかそれとも彼等自分の發明なるか何とも此の點は申し悪く候此の頭髮の結ひ樣はハックロ種族の住居いたす處にては何れも皆一樣にて候らへ共ハッカと雜居いたし居る處などは或は少々其の感化を受け居る樣にも見受けられ候

第三圖



ハッカ種族結髮の殊徵は甚だ我國に似たる事に御座候と計りではわからず候らへ共其のピンを張りたる其のットを出したる樣を一寸見候らへばさながらその儘かの感有之候程にて其の牛の糞卷のまん丸くして長方形をなさゞるならば而して後ろ姿の頸より上のまゝならば先づ判斷に苦しみ申すべし、我々には、されども之を飾れるカンザシの異樣なると其卷き形の殊別に長方形なる、中凹くして上下反りたる等は何處迄もハッカ殊風にてわきて之を結ぶ順序を一見致し候らへばハックロ種族の結方とも判然わかたれるとに御座候

第四圖



圖の如く牛の糞卷餘程たてに長くして反りたる處を特徵とせらるべしレットを出せしとは申せども甚だ僅かなる毛を寄せしものに候らへば中なる毛見はれてこれは甚だ見悪きものに候笄を用ゆるとはハックロと同樣に候らへ共細かく見ればハッカの方大なるものを用ひ候樣に御座候これに猶おかしきは彼等のヽヽヽおこそ頭巾に御座候黒木

第五圖



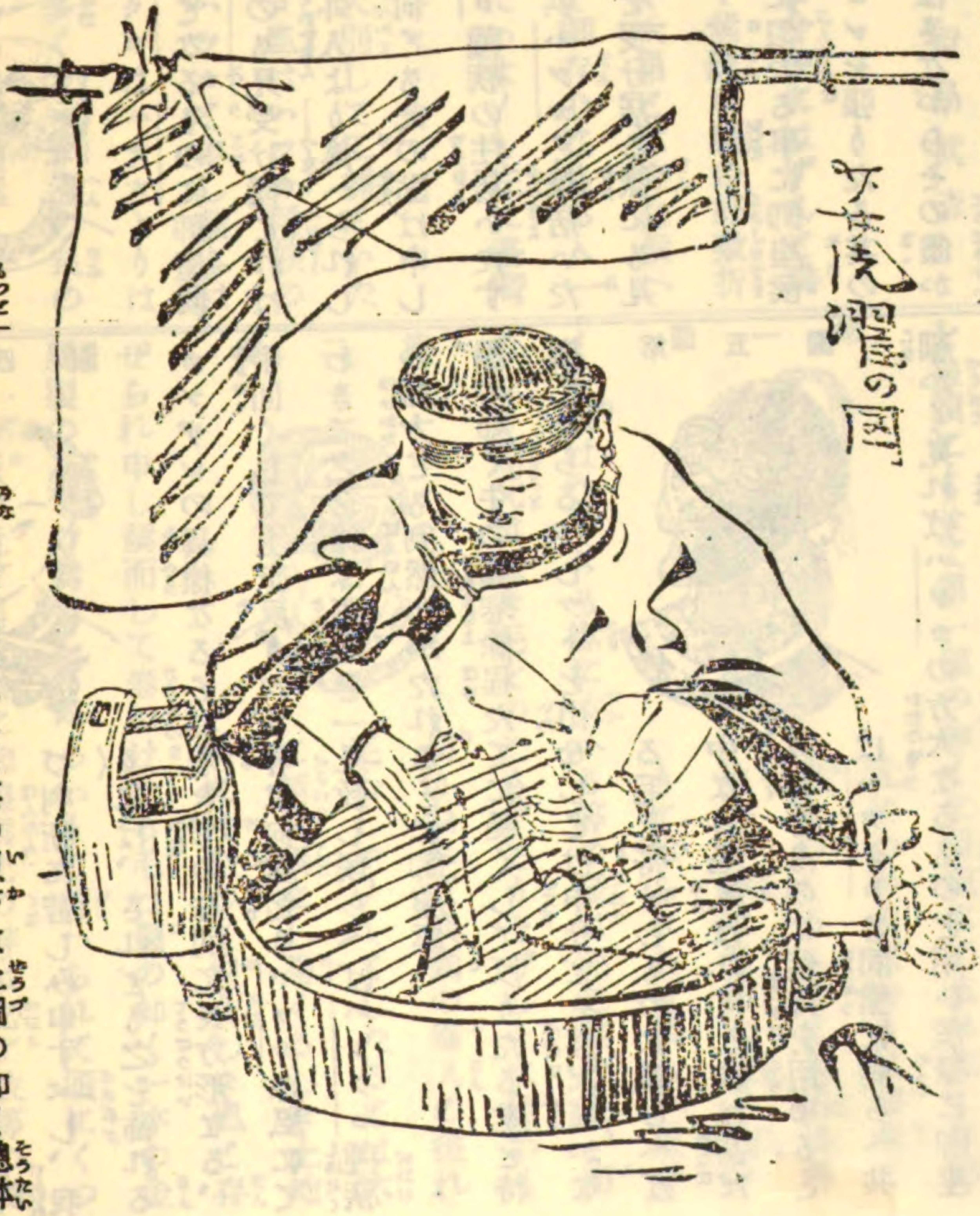
綿(？)の幅二尺計りなるを不風流に頬冠りし或は猪首にまはし結びて出まはり候而して

ハツカは決して足を縮めず自然のまゝにて從つて其の靴も大形なるを用ひ候指さきは尖り居り候らへ共こは少しも指の自由をさまたげざる様に御座候

此二様の結び風になほ一つ加へらるべきはハツカの或るものが結ぶ圖の如き形に候(第六圖)これは極くいやしき結び風にて小生はあまり立派に書ぎ過ぎ候其暮しの下等社會の婦人四十以上のものに尤も多く見掛け候



第六圖



頭髪の結様は大概以上記す所の如き有様に御座候而してこれは皆十七八以上にて其の以下は上圖の如く總躰に引きしめて組み下げし後前額より後頭に巻きて其末

端桃色緑色の糸をつぎ之を大きく其の前部に巻きて飾りと致し候漆黒のつや〳〵したる頭髪に桃色の大圓巻は甚だ可憐に見受けられこれに支那流の頬紅さして淡化粧したるなど優しきものに御座候前髪は前圖の如き中央より双方に解き別けしもあり或は束髪流にバラッと額に冠るもこれあり候らへ共大概はこれ無き方多きが如く見へ候

この小女は飾り風は臺灣特有の由にて或る支那人はわれに向つて大に自慢いたし候ひしが成程自慢いたす丈の事はこれあり候

先づこれにて單簡なる結風は結尾といたし次はかんざしにうつり申すべく候

古井の水（承前）

九皐漁史譯

さて余は其頃未だ寂莫として尚多くの古風を遣せるストラスボルクの市に到着せしや直ちにシユナイデルの許を音訪れて己が身と伯父より授かりし一封の添書とを猶豫なく差出したり其門の上記して

公共保安會委員

余が若年なる斯る文字を見ても更に其何の意味なるかを知るに由なかりしかば胆太くも直ちに應接所に通りてシナユイデルに面會を請ひしとは思ふに君の信ずる能はざるところならん

余はこの應接所に俟ち居ける間に何心なく四邊の光景に眼を注ぎたりしが身敎法に從事し居る人には相應しと思へる物更に見えず壁上にはロベスピール、マラー等の肖像を掲げ大なるミラボーの半身像は下に叛逆者と注し共和黨の名簿宣言書烟管幷に火器の類は室内に雜然たり又其室の中央には齋と酒とにて汚れたる粗末なる机横はりてこれに大なる豚の尾の如き頭髪を無雜作に背後に垂れ頂に三色の徽章を付けし薄餅大の

寢帽を被ぶれる一個の紳士に向ひ居たりこの人短き烟管を燻らし小さき物の本を讀みて居たるが其間に心臟の破れもやせんかと思ふばかりに歔泣し且時々書中の人物或は出來事等に就きて彼は云々此は爾々と詞短に批評することありしは其感覺の甚銳敏なる人とぞ知られし、あゝ盜賊出て不幸なるかなおゝシャーロット、シャーロットなどゝは彼が屢繰返したる言葉なりき

此紳士の讀みゐたる書はウエルテルのわづらひとて專ら當時の狂態を寫したるものにて彼も亦實に流行を追ひゐたるなり此時余は彼に向ひて師シュナイデルに見ゆるを得るやと問ひしに彼忽ち余を顧みて一睨せし其顏色の凄じかりしは今ははや四十年の後なれども尙余が屢夢に見て忘るゝ能はざるところなり

一睨して彼は言へり、師の誰とな汝は未だ公民シュナイデルが夙に僧侶などいへる謂れなき假面を脫ぎ捨てたるとを知らざるか汝もし今少し年老けて居たらんには師シュナイデルなどゝ言ふに於ては立地に獄屋に投ぜらるべきにしからず其よりも尙輕き罪をもて今日までに非命の死を遂げたる者其數を知ずと言ひ終に室內に掲げありたる斷頭機の圖に指さしぬ

余は愕然として、シュナイデルとは何人ぞ彼は希臘語の敎師座主の一個僧侶の一個にあらずや寺院の廢せられん限りは又アテクレオンの歌を編みし名高き學者にはあらずや

獰惡なる相の余が侶はいらへぬ、然り汝がいふところ皆然りされど彼今は公共保安會委員の一個にて汝が首を打落さんやう命令するとこの一杯の麥酒を傾くるより重大の事とは思はざるべし

斯く言ひて自ら泡だてる一杯の酒を掴みほしそれより余は伯父が余を入門せしめんと爲したるシュナイデルの履歴に就きて徐に左の物語を始めたり

シュナイデルは千七百五十六年に生る初はウルツボル

グに遊びしが後ある寺院に入りて九年の苦業を積み其處にて學識才幹兩つながら説教者として雙ぶ者なきの名譽を博しウルデンボルグのチヤーレス侯の法教師となりぬ此頃日耳曼にては「イルーミナチ」の教義傳播せんとする初なりしかばシユナイデルは直ちに其徒に結べり彼はコローンの大學に聘せられ其處にて希臘語の教授となり居たるが往行の不規律なるより竟に其職を失ふの止むを得ざるに至れり夫よりストラスボルグに來りしは恰も佛蘭西革命の創にして暫時の間は其地の革命黨員として重要の地位を占め居たり

斯く余が侶がシユナイデルの履歴を物語り畢りし頃は余等は既に幾分の知己となりしかば余は夫より己が履歴己が修めたる學業愉快なる田舍の生活親戚の姓名幷に共和政府の命令にて宗教の廢せられたる以前に余が寺院にて從事し居たる職業の大略を物語りたりこの物語の中にて余は屢々從姉メリーといへるとを繰返しければ紳士は既に余が心の裡にメリーといへる温かき情の罩りゐるとを見遁さゞりき

夫より余等は話頭をウエルテルのわづらひに轉じて共に書中の妙所を批評せしが余は最初の想像にも似ず彼が心の意外に優しきに氣を奪はれ又彼が戀或は情等の事に就きて論ずるとの屢余が心中の愛情を呼び起さしむるに太く敬慕の念を起したりなべて人此境遇に在るときは趣味を解する力甚衰へ如何に拙劣の詩文といへども多少己が心と相合ふときは高尚優美の傑作と賞讃するものぞかし

彼は又大に叫びて、正直なる少年よ我は汝の無邪氣なる談話を聽き汝の罪なき顏色を見るを好む嗚呼痛ましいかな此世は實にそれにひきかへて恐怖罪悪鮮血をもて充滿されし修羅の巷我等其中に踏み迷へる者は日としてこの呵責を免れ尙出來得べくんは再び汝が如き少年たらんと欲せざるはなし

と言ひて再び涕泪を啜りて確く余が手を握りぬ余は斯る浮世に彷徨ひ出でし其第一着に斯る仁人に逢ひて其助を借るに至らんとする幸運を祝しぬ又此時初めて余が里人等が是等の共和黨員を目して兇悪殘忍の者となしたるを甚だ謂れなき誣言となし小羊の柔和もこの大鼻の紳士にはよも及ばざらめと思ひたり頓て紳士は其身政府の一役人なるよしを告げぬ余は之を聞きて如何なる地位の人ならんかと頻に考へ居たりし時突然隣室の戸開きてシユナイデルぞ現れ出でたる

シユナイデルの入來りしや初は余に注目せずしてつと新知己の方に歩み行き霹靂一聲、咄酔漢汝又譫語を吐き居るか汝の時刻に後るゝは常なり彼處に先刻より汝の麥酒と御詫の終るを俟つ者十四個あり

余は呆然として蹌き出づる新知己を目送せしときシユナイデルは余を顧みて言ひき、彼は我黨に與して處刑者を務むるものなり常に時刻をだに守らば得難き股肱の一個なれども彼奴生來酒を嗜み且常にウエルテルのわづらひに就きて諄々しき説法を爲す癖あり

＊　＊　＊　＊　＊

余は此ロベスピールの配下に屬して慓悍の名を得しシユナイデル其人の心を得るに至りしは果して彼が余が伯父と舊交のあるに由りしか或は余が彼に事へし功勞に由りしかを知らずされど彼が甚しく余を愛して常に其身邊に余を從へしは事實なり敎法の事希臘語の事は如何になりゆきたるか今は言ふまでもなし澳太利の軍は國境に蝟集して捷報日々櫛の齒のひきもきらずストラスボルグの子弟幷に佛蘭西全國は擧げて戰爭の熱に煽られて宛ら鼎の沸くに似たり余も亦この熱氣に感じては何の躊躇をか爲すべき直ちに彼の處刑者と同樣なる三色帽を被ぶりて腕を扼したるぞ勇ましき

斷頭機は鮮血晞く間なしストラスボルグを鎭撫せんとて巴里より下りしセーント、ジヤストは恐るべき嚴重

の政策を執りて反對する者は少しくも假借するところなしシユナイデルは又處刑者と共に其後に從ひて嚴密なる觀察使として匪徒の逮捕にをさ〳〵怠りなかりき斯る間に余は年恰も十六を重ねて血氣方に旺なる天晴の壯士と爲りければ進で騎兵の隊に加はり脅迫せる墺太利の軍を蹂躙し屯集せる移住民を威嚇し居たりかく職務の繁劇なる間も余がメーリを慕ふ情は聊も減せず只髭と共に次第に增加して年未だ十七ならざるに身は既に婚姻の期熟せりとなし何人にまれ余がこの戀を妨げんと試むる者あらば用捨なく其喉を剜り與れんと決心したり

余がストラスボルグに滯在せる間に如何なる事變の故鄕に起りたるか又其僻遠の地方にも麽樣にして革命の餘波が打込みたるかは今茲に說くべき必要なけれどもかの大祭典の巴里に執行せられてより余が祖先の宗敎を奉ずること全く新政府の禁ずるところとなり其敎師は大低潛伏し然らざる者は國境の外に放逐せられ或は刑場の露と消えしといふことを一言し置かざるべからずされば又余が故鄕にては伯父の會堂は閉され伯父の身は弟、エドワードの寄食人となりぬ　そして此ばかりにて外に災厄の起り來らざりしは全く彼が里人の中に名望の高かりしとエドワード、アンセルが地方に勢力の有りしとによりてなり

エドワード、アンセルもまた革命の間にある重要なる地位を占め居たり彼は常に軍議に與りぬ又集會あるときは必ず其場に臨みて廣く交を名士に結びぬ加之鄕黨の中に在りては貴族政治を疾呼せし一個なりきさりながら此地方の人民は大抵沈着にして朴直なる日耳曼農夫の子孫のみなれば革命の熱も都會に比すれば遙に其度を低うし只時々巴里或はストラスボルグより委員の來れる時のみ死灰炎を發して田夫野人に佛蘭西に革命黨のあることを知らしむるのみなりし

余は一週間の歸休を得るときは毎に故郷に歸りて叔父の厚遇を享け又その愛女よりも易らず暖き情をもて欵待されぬ
余がメリーを慕ふ情は何程まで其歩を進めたるか又叔父エドワードが余がメリーを愛する心の尚引續きゐたるを發見せしときの怒に就きては具さに君に物語らざるべしされど茲に一言すべきは其時彼は誓へり憤れは尚メリーを其部屋に幽閉して余に告ぐるにこの後もしメリーに近づかんとするに於ては立地に從來與へし特權を殘らず剝ぎ取るべき由を以てし且言へり女メリーは決して汝が如き無識無產の下士輩に嫁せしむべき者にあらずとメリーも此時また言ひき父の諾ひ給はざる上は決して何人にも歸がまじと嗚呼余は如何にせんか望を絕ちて彼を見捨てんか憐なる伯父ジャコップも今ははや一言の余に與ふべき策なし否一言の發すべき勇氣なし少やかなる彼が會堂は既に廐となり有難き法衣は肩より裂かれて今は全く其影なしされど余は兎まれ角まれと此事を彼に打明かしゝ時彼は太く思ひ當りたらん如く余に向ひて言ひけるやう汝は此婚姻の事に就きて豫てわが舊友なるシュナイデルにも商りしや彼今は汝の朋友にもあれば必ずよきに力を添へんにと君は伯父ジャコップの如き溫厚なる紳士が余をして人命を害するとを其職となす殘忍なるシュナイデルと親しき朋友とならしめんと且この人に一身の大事を協議せよなどゝ忠告せしとをもて必ずや一條の戯言と想像するならん然れども此頃にては斯る事件は實に常なり斷頭機を用ゐると舞踏を催すが如く愛國者としいへば酷薄ならざるべからざる者となせりかくて余は伯父の忠告に從てストラスボルグに歸り直ちに公共保安會委員の市の長の撰擧權を得んとを請求したり（未完）

山科閑居

（口繪の繪解き）

君父の仇は倶に天を戴かずといへる敎訓が最も貴重せられたりし元祿の昔、赤穗侯の遺臣四十七士が亡主淺野内匠頭長矩の爲に吉良上野介義央を襲殺したりしは、何人も之を記憶する所たり。
當日復讐同盟の首領大石良雄は、窃に復讐の準備を整へたりしも、仇家の主に備ふること最も嚴にして竟に乘ずべきの機なかりしかば、彼は洛南山科の里に閑居

し、故らに復讐の意なきものゝ如くしたりき。而して仇家の備を怠るに及び、急に東行して、元祿十四年十二月十四日の雪夜に乘じて仇を復せり。

村園門苍山科の里樹翠に草深く、坐ろに行客をして千古の苦心を懷しむるものあり。

時事一斑

西園寺文部大臣

西園寺文部大臣其敎育意見を告で曰く。

日本は世界の文明富强國となりたると共に亦列國嫉妬の中心たらんとす。日本文明富强の根底たる科學の培養を力めて大に之に當らざるべからず。隨て英語の普及を計らざるべからず。隨て國語學の如き比較的不用の學科は之を普通科より除きて時間を節せざるべからず。

女子敎育は必ず旺盛ならしめざるべからず。

修身課には順境に在て功を奏したる偉人の傳記を加へんと欲す。

帝國敎育大會

は五月二十三日より廿六日に至る四日間京都に會したり。

議決中下の條項もありといふ。

問題

一 小學校の兒童へ尙武の氣象と艱難堪にふるの體力を養成せんには如何なる方法を設くへきや

二 小學生徒氣風養成上學校に於て特に注意實施を要する件取調の議

決議（二問題合併決議す）

一 古來武士の武術を練習せし實歷陸海軍人勤務上の艱難等に關し談話をなし及征淸軍戰死者の効勞を表彰する事

二 小學校所在地營の聯隊旗に關する歷史を說話し及招魂祭には生徒をして參拜せしむる事

三 軍事に關する繪畫模型等を學校に備ふる事

四 尋常小學校より野戰對抗に類する遊戲を加へ殊に高等小學校に至りては兵式體操の外適宜方法を設けて夜中學校内外を獨歩せしむる等務めて其膽力を養ふ事

五 時々游泳を練習し「ボート」等の競爭運動をなし又海岸を航行し軍艦の來往するあらば之を目擊せしむる事

六 校下徵兵の入退營には生徒を引率して送迎せしむる事

七 凡て軍人を尊敬せしめ學校の儀式には成るべく軍人の臨席を乞ふ事

八 生徒をして兵營を參觀せしめ又行軍演習等あるときは之を目擊せしむる事

九 時々實彈射擊を觀覽若くに演習せしむる事

十 高等小學校に於ける遠足旅行には山川を跋涉して豪壯の氣を養ひ食料を携へて野宿をなす等艱苦に慣れしむるの方法を施す事

十一 生徒を引率して害蟲の驅除等をなさしむる事

十二　土地の狀況に應する實業を課し又校舍內外の洒掃修繕等專ら勞働の習慣を養成する事

十三　襪卷足袋晴傘等を用ふるを禁し水浴を行ふ等皮膚を强固にするの方法を設け風雨寒暑に慣れしむる事

以上の各項は男女の區別又は土地の情況により斟酌せしむるを要す

社會の傾向見るべし。

軍事上の大發明

銃砲製造家マキシム氏彈藥製造練熟家ショップハウス氏と新式大砲及び水雷火藥を發明す。其發明に由れば、大砲丸を十哩の遠に飛ばし、其彈着點に於て、破裂して四周數百呎の物を粉碎すと云ふ。故に軍艦を破碎するに必ずしも適中するを要せず、其近傍水中にて破裂すれば、以て軍艦を轟沈すべし。

暴風雨

暴風雨九州の西北部より中國の大半を掠めて去る。倒家浸水夥しく、死傷極めて多し。加ふるに全國各地陰雨連日、土用半を過ぎて未だ酷暑を感ぜざる也。

『大軍之後。必有凶年。』の語をして事實ならしめざるは吾人の切に祈る所。

虎列拉

虎列拉病本年初發以來七月三十日までにて、全國總數一萬一千四百九十九名。內死亡者七千六十四名。即ち患者の半は死亡するものたり。

汽車顚覆

去月二十四日傷病兵を載せたる山陽鐵道の汽車絲崎にて顚覆し、死傷者あり。同日九州鐵道列車亦顚覆す。汽車の如き多數の生命財產を托せらるゝものは、最も大に其安全を保護せざるべからざるにあらずや。

家庭雜誌夏期大附錄

家庭雜誌第六拾號（八月廿五日發兌）に添ふ

荒野の泊屋　嵯峨の屋主人
夏　蘆花生
『未定』　愛山生
想ひ出るまゝ　國木田哲夫

